自由気ままにプレイしてたら、何故か妖怪認定されました　Re：メイク

玖珂凌駕

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この二次小説は以前書いてたものを書き直して再投稿したものです。また、投稿頻度はかなり遅いと思いますが暖かな目で見てくれると嬉しい限りです。

今度はアニメまでやってた所まで書きたいと思ってます。ではでは、あらすじへどうぞ～（。∀。）っ

ある日、ある装備を手に入れてから妖怪認定をされて、何故か女の子扱いをされてしまう。

それに本人は目立つのが好きでは無いのだが、いつも自然と目立ってしまう影宮　万

里もといエイによる自由気ままなゲーム・イズ・ライフである。

目次

自由気ままに初プレイの時間です　1
自由気ままに初ダンジョンを攻略します　16
自由気ままにボス攻略です　28
自由気ままに原作　主人公の初登場です　52
自由気ままにイベントに向けての準備です　62
自由気ままに第一回イベントのお時間です　68
自由気ままにリアル話をしたいと思います　82
自由気ままに地底湖に向かいます　91
自由気ままに第二回イベントに向けて　100
自由気ままにＥＸクエストに挑戦します　111
自由気ままにスキル修正と第二回イベントの始まりです　121
自由気ままに第二回イベントを楽しみます　128
自由気ままに銀翼を討伐します－前編－　136

自由気ままに銀翼を討伐しますー後編ー　147
自由気ままに二人とは別行動のようです　161
自由気ままにフェンリル討伐です　171
自由気ままにイベントが終了しました　183
自由気ままに妹がＮＷＯをやるそうです　194
自由気ままに新スキルのお披露目です　205
２０話　自由気ままにゼロ育成です。　214
２１話　自由気ままに見た目が変わりました。　227

自由気ままに初プレイの時間です

「遂に、遂に手に入れたーッ」
俺は家に帰って来たのも束の間、そそくさと部屋に戻ると大声で叫んでいた。
それもそうだ、念願のゲームをやっとの思いで手に入れたのだから。
マジで苦労したかいが合った。
「お兄、うるさい！」
「あっ、すまん」
妹に怒られてしまった。
まぁ、そんな事は些細な事として早速これをやるとしますか!!
えっ!?、俺が何のゲームをするかって？
それは勿論、今話題の新作ＶＲＭＭＯゲーム……『Ｎｅｗ　Ｗｏｌｒｄ　Ｏｎｌｉｎｅ』???通称『ＮＷＯ』に決まってるだろ。
あっ、自己紹介が遅れたな。
俺は影宮　万里。

黒髪短髪、黒目のごくごく普通の高校1年生だが、な～ぜか良く女と間違えられてしまう。

本当に謎なんだよ……って誰に説明してんだ～俺ｗ。

とにかく、俺は今からこのゲームをやる所だ。

「よし、初期設定はこれで完了だな」

俺は横になり、早速　電脳世界へとダイブする。

「リンクスタート……な～んてなｗ」

そう呟きながら……。

「っと、そっか。まずはキャラクター作成からだったな」

今、俺自身がいるのは何もない真っ白な空間で見渡す限り何もなく、どこまでも続いてる感じだ。

暫くすると、目の前にウィンドウが開いた。

「おっ、キャラネームか。まぁ、影からとってエイで良いだろ」

俺は余りにも楽しみ過ぎて、キャラネームを安直に決めたことが後々、あんな事になるとは思いもよらなかった……な～んてなｗｗ今のは軽い冗談だ。

そもそも、こんな事で面倒な事が起こってたまるか。
「次は初期武器か」
大剣に片手剣…メイス…杖……う～ん、色々あってどれにするか悩むな。
それにどれもイマイチぴんっとこないんだよな～。
「おっ、これは」
俺が悩んでいるとある武器が目に留まった。
「刀か…」
俺は直感で思ったこの武器だと何か面白い事が起きそうだと……。
ただ、この直感があんな方向に進むとは、この時の自分は思いもしないだろう……。
「後はステ振りと外見か」
ステ振りはＨＰ、ＭＰ、ＳＴＲ、ＶＩＴ、ＡＧＩ、ＤＥＸ、ＩＮＴの各種ステータスに振るわけだが……。
「まぁ、シンプルで良いだろ」
そう呟きつつ、パッパッとステ振りを終えた。
残りは外見のみだが、俺はここで致命的な事が発覚した。
な、な、なんと……身長が変更不可って事だ!!。
俺の身長は１５５㎝。

そう、かなり小さいのだ。
今、低すぎだろｗｗって思った奴……後でぶん殴りに行くからな！
はぁ～、折角のＶＲＭＭＯゲームだから、身長を少し高くしたかったのに……。
「オワタ……」
まっ、変えられないだったら仕方ない。
他の所を弄るか～。
う～ん、そうだな～…眼は赤、髪を肩に届くくらいまで長くしてみるか。
うんうん、いい感じに出来たな。
「んじゃ、完了……と」
そうして、設定が全部終わり、ようやくゲームスタートだ。
俺の体が光に包まれ、次に目を開けた先には、活気溢れる城下町の広場であった。

「おおっ、ここがＮＷＯの世界か。おっと、まずはステータスの確認だな……ステータスッ」
すると目の前にヴォンっと半透明の青いパネルが表示された。
エイ

Ｌｖｌ
ＨＰ　４０／４０
ＭＰ　１０／１０
【ＳＴＲ　５０〈＋１０〉】
【ＶＩＴ　０】
【ＡＧＩ　５０〈＋５〉】
【ＤＥＸ　０】
【ＩＮＴ　０】
装備
頭【空欄】
体【空欄】
右手【初心者の刀】
左手【装備不可】
足【空欄】
靴【初心者の靴】
装飾品【空欄】
【空欄】

【空欄】

??????スキル

??????????????なし

「……ありゃ、ステ振りミスったか」

まさか初期のステ振りがステータスになるとは思いもしなかった。

説明書も読まずに始めたのが間違いだったか。

「ま、まぁ～何とかなるだろ」

もし、駄目そうなら面倒だけど新しくキャラを作り直せば良いだけだしな。

取り敢えず、一度外に行って戦ってみるか。

～少女移動中～

おい、誰が少女だ…コラ

「よし、この辺りで良いかな」

テロップに変な事が書かれていたと思うが今は置いておこう……にしてもＡＧＩが５０だからか、ここまでに１分程度で来る事が出来たな。

「中々、このステータスも悪くないようだな」
そう呟いていると草むらから一匹、兎リンゴみたいな魔物が飛び出してきた。
俺は、その魔物が着地すると同時に近づき、刀を抜刀斬り上げで攻撃をしたが、それだけでは倒せなかった。
なので、そのまま斬り下げをして攻撃を当てると、そのモンスターは光となって消えていった。
ピロリン♪
《レベルが2に上がりました。》
「おおっ、レベルアップか」
俺は早速、ステータスを確認して見たがステータスには変化は無かったが、代わりにステータスポイントが5ポイントになっていた。
「なるほどな」
まぁ、説明するの面倒だし、流石に説明しなくも皆は理解してるよな……。
ウンウン、そうに違いない。
説明が面倒だとは一寸も思ってないからな！
んじゃ、レベリングといきますか。キングクリムゾン

……一時間後

「最初は不安だったが案外行けるもんだな」

エイ

Ｌｖ１５

ＨＰ　４０／４０

ＭＰ　１０／１０

【ＳＴＲ　７０〈＋１０〉】

【ＶＩＴ　０】

【ＡＧＩ　７０〈＋５〉】

【ＤＥＸ　０】

【ＩＮＴ　０】

スキル

【抜刀術Ⅳ】【刀の心得Ⅴ】【暗殺者】【空中歩行Ⅱ】【跳躍Ⅱ】

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【抜刀術】

抜刀スキルが集まったスキル

熟練度によってスキル解放
・取得条件
抜刀してから1秒以内に攻撃を３０回当てる
【抜刀・一閃】
前方に横薙ぎをするスキル
【抜刀・鎌鼬】
抜刀時、鎌鼬を飛ばせるスキル
【抜刀・反撃】
敵の攻撃を躱して反撃するスキル
【抜刀・乱舞】
敵を無数に斬りつけるスキル
【抜刀・電光】
一瞬で敵を斬り抜けるスキル
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
【刀の心得】
刀で与えるダメージ＋１％
最大値１０％

・取得条件
刀で１０回攻撃する
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
【暗殺者】
背後からの攻撃時　ＳＴＲ＋３０％
２０％の確率で即死させる
・取得条件
相手の背後から気配を悟られずに攻撃する
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
【空中歩行】
空中を地面の様に足場として使える
熟練度によって歩数制限が上昇する
・取得条件
空中で攻撃を紙一重で回避する
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
【跳躍】
ジャンプ距離が上昇する

熟練度によってジャンプ距離が上昇していく
・取得条件
ジャンプを10回する
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
抜刀術のスキルは熟練度をあげる度に使えるスキルが増えていく様で、今は上の二つのスキルだけが使える様になっている。
「けど、HPとMPが全く上がらないな」
MPはINTが0だから分かるが、HPはVITかDEXに振らないと上がんないのか？
後は、HPとMPに直接振らないと上がらない仕様になっているかだよな～。
これが説明書を読まずにさっさと始めた報いか。
こう言う所がなんもわっかんねぇw
まぁ、攻撃が当たらなければなんの問題もないけどな！
「おっ、敵ハッケーン。少し距離があるが大丈夫だろ」
そう呟くと、俺は地面を蹴り敵に一直線へと向かった。
それから、敵の背後まで行くのと同時に【抜刀・一閃】で敵を一撃で倒した。
ピロリン♪

《スキル【一撃必殺】を取得しました》
《スキル【電光石火】を取得しました》
《スキル【双龍の刃】を取得しました》
「ラッキー、一気に3つもスキルゲットだぜ」
俺はさっき手に入れたスキルを確認するため、ステータスウィンドウを開き、スキルの確認をした。
…………俺は一度、自分の眼を疑った。ゴシゴシ
うん、見間違いでは無かったようだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【一撃必殺】
相手を一撃で倒すとＳＴＲ＋１％する
一撃で倒せなければリセット
最大１００％
・取得条件
相手を一撃で倒す

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
【電光石火】
ＡＧＩの５０％がＳＴＲに上乗せされる
・取得条件
３秒以内に１０ｍ離れた相手に攻撃する
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
【双龍の刃】
ＨＰ・ＭＰを除くステータスの最大値（装備とスキルを除く）が２つの場合、それらは二倍でＨＰ・ＭＰ以外は半減する
・取得条件
全く入手方法が違う２つのスキルを同時に取得する
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「何かぶっ壊れスキル手に入れたが、明日は学校があるし、そろそろログアウトするか」
俺は半透明の青いウィンドウを開けると、そこにはログアウトボタンが無い!?

……と言った事もなく、普通にログアウトをした。

????????????????????

【ＮＷＯ】やばい刀使い見つけた

１　名前：名無しの大盾使い
ヤバい
２　名前：名無しの大剣使い
ｋｗｓｋ
３　名前：名無しの槍使い
どうヤバいの
４　名前：名無しの大盾使い
今日、狩りの帰りに見たんだかムカデを一撃で倒した
５　名前：名無しの魔法使い
普通じゃね
６　名前：名無しの大盾使い

いや、それだけじゃなくて何処から知らないが突然現れて倒していったんだ
７　名前：名無しの大剣使い
ＡＧＩにかなり振ってて、武器が強かったとか
８　名前：名無しの大盾使い
ステ振りは分からんが装備は初期装備だった
９　名前：名無しの槍使い
うーん、ますます謎だな
１０　名前：名無しの魔法使い
もしかしたら、隠しスキルを手に入れた可能性もあるな
１１　名前：名無しの大剣使い
まぁ、それなら自ずと名前が上がってくるだろ

１２　名前：名無しの大盾使い
そうだな
また何か分かったら書き込むわ
１３　名前：名無しの槍使い
よろしくお願いします！（敬礼）

自由気ままに初ダンジョンを攻略します

今日はゲーム始めて3日目のログインである。
2日目はどうしたって？察してくれ……何も無かったんや。
つまらんほど、何も無かったんや……。
「んじゃ、今日も今日とてＮＷＯをやっていきますか」
さてさてさ～て、今日の目標は資金稼ぎだ。
流石に初期装備のままは嫌だからな。
さらに、今日は金曜日!!
ゲームやりたい放題だぜ。キリッ
「昨日は雑魚狩りだったが、今日はダンジョン探索とかしたいな～」
取り敢えず、適当に森の中を進んで行きますか。
んじゃ、何かあるまで……キングクリムゾン

……1時間後

「うん、思っていた以上に何も見つかんね」

流石にここまで何もないとショックが大きい……事は全く無いし、こう言う事は良くあることだ。ウンウン

「にしても、かなり深い渓谷だな」

俺はそう呟きながら、下を覗き込んでいた。

俺が今さっき見付けたのは、この渓谷位だが探索するには流石に不可能だ。

そもそも、下までどうやって行くんのかがわからん。

絶対これ、運営の意地悪だろ。

でも、こう言う所には何かしらあるのがゲームの鉄板なんだよな～。

ってな感じで、色々と愚痴やら考察やらしていたせいで、俺は背後からの近付いていたモンスターに気付かず、攻撃をされてしまった。

まぁ、この程度の攻撃ならギリギリで避けることが出来るがな。

だが、咄嗟に避けたせいで良く足元を見る事が出来なかった。

そして、着地した瞬間に足元が崩れてしまったが、何とかバランスを保ち落ちる事は無かった。

しかし、モンスターからの追撃は避ける事が出来そうに無かったので刀を抜刀し攻撃

を防いだ。
「おっ、狼か。初めて見たな」
けど、攻撃を受け止めた瞬間、俺は謎の浮遊感を感じた。
恐る恐る下を見てみると、足元には地面が無く、俺は渓谷に真っ逆さまに落ちる瞬間であった。
「ノックバック持ちとは聞いてねーーーッ」
そう叫びながら……。
「くそっ、仕方ないか。耐えてくれよ、俺の装備」
俺はそう呟きながら、空中で体勢を立て直し、渓谷の壁に刀を突き刺し、そして足を壁に当てて減速するように試みた。
「止まれーーーーッ」

「ふぅ～……取り敢えず、何とかなったな」
地面との高さ残り１ｍ……ギリギリだった。
一息を着いたのも束の間、刀と靴が光だしたのですぐさま、地面へと着地した。

そして、刀と靴は消えて無くなってしまった。
「やっぱ、耐久値が無くなったか」
今の俺の状態はスッポンポンだ。
あっ、丸腰って言う意味だからな。
断じて丸裸って事じゃないからな!!
てか、今さら思ったんだけど落ちる瞬間【空中歩行】使えば良かったんじゃね!?
「何やってんだー、あの時の俺ーーーッ」
まぁ～、過ぎた事を悔やんでも仕方無い。
それより今は、どうやって上に戻れるか考えないといけない方が先決だ。
それに、この場所は何故だか微かに霧かがっているので、視界が悪くなっている。
未知の場所で視界が悪いのは、結構ハードなんだよな～。
取り敢えず、探索でもしようと思い歩き出した。
特に何事もなく歩き続けていると、遠目ではあるが沢山の刀が刺さっている場所を発見した。
数は1万を超えるかって位ある。ゴシゴシ
うん、見間違いでは無いようだ。
「ま、まぁ～丸腰だし助かった」

取り敢えず、１本だけ使わせて貰おうと思い、どれが良いか迷っていると、どう見てもあからさまにヤバい刀があった。
見た目は刀身が赤黒くて、柄には何かの御札が貼られていた。
うん……どう考えても、絶対にヤバくて駄目な奴だわコレ……。
しっかし～、それでもこう言った物ほど、使ってみたくなるんだよな～俺は。
そして、その刀を抜こうとしたら、俺の目の前に薄青いウインドウが現れた。
『この刀を装備しますか？　ＹＥＳ　ＮＯ』
「勿論、ＹＥＳだッ」
俺はＹＥＳを押して刀を引き抜いた。
そして、その瞬間……何かが起こる事もなかった。
「取り敢えず、ステータスッ」
エイ
Ｌｖ１８
ＨＰ　４０／４０
ＭＰ　１０／１０
【ＳＴＲ　７５〈＋０〉】
【ＶＩＴ　０】

【ＡＧＩ　７５】
【ＤＥＸ　０】
【ＩＮＴ　０】
装備
頭【空欄】
体【空欄】
右手【封印されし呪刀】
左手【装備不可】
足【空欄】
靴【空欄】
装飾品【空欄】
【空欄】
【空欄】
スキル
【抜刀術Ⅴ】【刀の心得Ⅵ】【双龍の刃】【一撃必殺】【電光石火】【暗殺者】【空中歩行Ⅲ】
【跳躍Ⅲ】

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
封印されし呪刀
《ＳＴＲ＋０》
【装備解除不可】
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

うん………やっぱりヤバい代物だったよ。
てか、どうすんのコレ………一生、装備がこのままだと嫌だよ。
「んまぁ、町に戻ればどっかで取って貰えるだろ………多分」
某ゲームだと、良く教会とかでお金を払って解いて貰うの見るし………。
まずは、上に戻る方法を探さないとな。
「もう少しこの辺りを探索してみるか」

～少女探索中～
だから、誰が少女だ

３０分ほど、探索していると怪しげな洞窟を見つけた。

「ダンジョンか……行ってみるか」
俺は中に入り、少し進んでみると開けた空間が見えたが、中には沢山のモンスターがウジャウジャと徘徊していた。
「流石にあの数を相手にしたくないな」
俺はもう少し辺りを注意深く見渡し、何かしらギミックがないか探してみた。
そして、俺はあることに気付き不意に笑みがこぼれた。
「なるほど、スニークダンジョンか」
面白い……今までゲームをやって来たがＲＰＧでスニークをするのは初めてだ。
「んじゃ、いっちょ行きますか！」
俺はモンスターの動きを良く観察しながら、少しずつ確実にこの部屋を攻略していった。
そして、俺は特に苦戦も無く、ダンジョン攻略を初めて１時間が経過した。
それに俺は新たにスキルを入手した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【隠密】
移動中、相手に気付かれにくくなる。

・取得条件
敵に見付からず、１０ｍ進む

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【気配遮断】
サーチ魔法やスキルに感知されなくなる。
また、相手に気付かれにくくなる
・取得条件
３ｍ以内に敵がいる状態で３０秒間気付かれない

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【暗殺】
背後からの攻撃で敵を一撃で倒すとＳＴＲ＋１％する
最大は１００％
ただし、背後からの攻撃に失敗するとリセットされる
・取得条件
【暗殺者】を取得した状態で敵を気付かれずに背後からのキル３０回をする

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「何だか、忍者とかス○ークとかになってる気がするな」
まぁ、偶々だよな………。
それより、遂にボス部屋らしき扉を遠目で見つけた。
ただ、その前にはやけにだだっ広い空間が拡がっており、今までと違ってモンスターが一匹も見当たらなかった。
まさかね………。
取り敢えず、俺は足元にあった石を投げてみた。
すると地面に落ちた瞬間………ドッカーン
うん、罠あるやん。
それに殺意マシマシの威力してますやん。
「まぁ、面倒だから上からいくか【空中歩行】【跳躍】」
俺はスキルのおかげで何の苦労もなく、あっという間に扉の前まで来た。
まぁ〜、ここまで神経を使うギミックだったからこれぐらい良いよな？
あっ、ズルとかは言うなよ！

「最後にステータスを確認しておくか」

エイ
Ｌｖ２４
ＨＰ　４０／４０
ＭＰ　１０／１０
【ＳＴＲ　８５〈＋０〉】
【ＶＩＴ　０】
【ＡＧＩ　８５】
【ＤＥＸ　０】
【ＩＮＴ　０】
装備
頭【空欄】
体【空欄】
右手【封印されし呪刀】
左手【装備不可】
足【空欄】

靴　【初心者の靴】
装飾品　【空欄】
【空欄】
【空欄】
スキル
【抜刀術Ⅴ】【刀の心得Ⅶ】【双頭の刃】【一撃必殺】【電光石火】【暗殺者】【暗殺】【空中歩行Ⅲ】【跳躍Ⅲ】【隠密Ⅲ】【気配遮断Ⅲ】

自由気ままにボス攻略です

「おいおいおい、何だよコレ…キリがねぇじゃん！こちとら、もうクタクタなんだよ」
俺はボスからの攻撃を避けながら、大きな声で愚痴を吐いていた。
あっ、どうも。
影宮　万里ことエイです。
現在進行形でボスと戦闘中です。
えっ、どうして俺がこんな状況になってるかって？
それは今から2時間前の事だ。

……2時間前
「よし、早速ボス攻略と行きますか」
俺は首の骨をポキポキと鳴らした後、自分の身長の3倍以上もある扉を開け中へと進んだ。

内装はいたってシンプルだった。
ある程度の広さと高さに多少の障害物があって、とても俺にとって戦いやすい場所だ。
「おっ、アイツがボスか」
見た目は完全に落武者だな。
名前は『未練の集まり』って…何だそれ。
さらに、何故か肩に狐の霊？てきなものが乗っているのが確認できた。
「取り敢えず、先手必勝【抜刀・鎌鼬】」
相手はこの攻撃を避ける動作もせず、普通に攻撃が当たりボスへとダメージを与えた。
さらに、その攻撃でボスのＨＰを２割も削った。
ありゃ、ボス弱くね。
それとも、俺のＳＴＲが高過ぎるだけか？
まぁ、考えるのは後だ。
流石にさっきの攻撃を喰らったからかボスは動き出したが、良くある単調な攻撃ばかりだったので、そのままボスの攻撃を避けながら、カウンターで攻撃をしてたら、５分少々でボスを倒してしまった。

「案外、呆気なかったな」
俺は出口を探そうと辺りを探索をしようとした時、背筋がゾッとして嫌な予感がした。
俺はそのまま自分の後ろを確認せず、すぐさま横に跳んで受け身を取りながら、さっきまでいた場所に眼を向けた。
「嘘だろ、おい」
そこには、倒したはずのボスが立っていた。
このボスのギミックか、それとも一定回数倒さないといけない系か。
と、考察をしている暇もなく、こっちに向かって攻撃を仕掛けてきた。
倒す前よりも速い攻撃で……。

そして現在……。
今もなを、ボスと戦って倒し続けていた。
ここまでくると、何かしらのギミックだと思って色々と試してみたが、特に何も変化が起こらなかった。
正直手詰まり状態だ。

ボスは２０回以上倒してみたが、攻撃が激化する一方で何も変わらない。
まぁ、攻撃が激化するって事は何かしらあるんだと思うのだが……。
はい、もうほとんど詰み状態です。
それに、ボスを倒す度に狐の霊?的な奴も攻撃が激化してるので、ＨＰバーがあるから倒せば多少は楽になると思うが、何故だか倒したくはないと思った。
何故かって?なんとなくかな～。
強いて言えば、直感かな。
「おっと、あっぶな」
流石に疲れてきた上、思考にも頭を取られてるから、ここまで激化している攻撃を今まで防いでいた狐火の攻撃を刀で防いでしまった。
「本当にどうしようか」
『なら、私が力を貸しましょう』
「えっ、誰?」
俺は辺りをキョロキョロしていると、１つの異変に気が付いた。
「刀が……」
そう、あれだけ刀身が赤黒い色をしていた刀が、刀身が徐々に黒くなっていき、光沢が発せられた。

そして、柄の先に狐の尻尾みたいなのが現れた。
何故こんな事が？っと思たが、良く見ると柄に張ってあった封印の札が無くなっていた。
そう言えば、さっき狐火の攻撃を刀で防いだが、もしかしてそれが原因か？
まぁ、偶然なのか必然なのか分からないが、何とか突破口が見えてきた。
「取り敢えず、どうすれば良い？」
『あの者を弱らしてから、心臓部分にこの刀を突き刺して下さい。そして……彼を解放させてあげて下さい』
「……了解」
俺はボスに向かって攻撃をしようとした時、あっちも刀の変化に気付いた様で、ヴオオオと今まで発しなかった禍々しい雄叫びを上げた。
なるほど、今からが本気って事か。
「面白くなってきたぁ。んじゃ、最終ラウンドといこうぜ」

「取り敢えず、初手の様子見としてはこれだな【抜刀・鎌鼬】」
今度の攻撃もボスは避ける動作もせず、攻撃が諸に入ったが最初と違ってダメージが1割も与える事はなかった。

その上、ボスのＨＰが微少だが徐々に回復している。
「固くなってる上に自然回復持ちかよ！」
多分、この状態が本来のボスの形だと思うのだが、それにしても反則的な強さだろ……。
それにさっきまでの攻撃が激化している状態が続いている。
「はぁ、これはちっとばかし本気でやらないとな」
俺は一つ大きく深呼吸をした。
取り敢えず、暫くボスの攻撃を受け流して分かった事は、さっきまでの単調な攻撃とは裏腹に洗礼された動きで攻撃を仕掛けてくるようになった。
それにＡＧＩは俺とさほど変わらないが、ＳＴＲは異常に大きなクレーターが出来る程なので、多分俺より高いだろうな。
その上、狐の霊が２０～３０発ぐらいの狐火を一度に放ってくる。
その中には追尾機能が付いているものもあるようでかなり面倒だ。
「よし、動きは大体分かってきたから、そろそろ反撃といきますか！【抜刀・鎌鼬】」
ボスはこの攻撃をまた避けようとはせずに諸に喰らったが、先程と同じようにダメージはあまり入らなかった。
俺は全力でボスとの距離を詰めようとしたが、それを狐の霊が狐火を一斉に放ってき

て妨害してきた。
「まぁ、これだけの弾幕だけで俺を止めるとは思わないことだな！」
俺は真っ正面から全力でボスへと向かった。
そして、俺に当たる狐火だけを見抜き、それを全て斬り落として刀を一度、鞘に戻した。
「【抜刀・鎌鼬】」
だが、ボスはまたもや攻撃を避けようとはせずに攻撃が当たった。
致命傷にならないから避けないのか、元々避けれないのか……まぁ、気にしてもしょうがないか。
取り敢えず、回復するより速くダメージを与えないとな。
俺はボスの近くへと辿りつき、通常攻撃の連撃をしてダメージを負わせたが1割ほどのダメージだった。
「にしても、硬すぎるだろ」
それから、暫く通常攻撃と【抜刀・鎌鼬】で攻撃をしているが、ＨＰの減りは雀の涙ほどだ。
スキルを使う度に納刀しないといけないので、どうしても効率が悪いし、狐火が多すぎて攻撃する数が減ってしまっているからだ。

まぁ、一応時間をかければ倒せないこともないんだろうが………。
「何か打開出来る糸口はないものか」
俺は攻撃をしながら、自身のスキルを確認していた。
すると、新たにスキルを覚えていた………と言うより、解放されていた。
それも二つも。
「これは何とかなるかもな」
スキルの内容を確認すると以下の通りだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【抜刀・反撃】
敵の攻撃を躱して反撃するスキル
ただし、相手のＡＧＩが自分より高いと失敗する
【抜刀・乱舞】
敵を無数に斬りつけるスキル

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

この二つのスキルで何とかなりそうだ

「んじゃ、いっちょ行きますか！」

俺は今まで通りボスへと近づき、いつも通りにスキル【抜刀・鎌鼬】で攻撃を仕掛けた。

そして、いつもだったらこの距離を維持しつつ、攻撃をしていたが俺は更にボスへと近づいた。

流石にこの距離で狐火を捌くのは少し苦だったが、何とかボスの懐へと入る事が出来た。

「【抜刀・乱舞】！」

この攻撃は諸に入り、ボスのＨＰを3割も削った。

「グオオオオ！」

これにはボスも効いたらしく、大きな砲口とともに刀を降り下げてきた。

「そんな攻撃には当たらねぇよ！【抜刀・反撃】！」

「グオァァァ」

俺は攻撃に合わせてスキルを発動し、更にＨＰを2割ほど削った。

これで残りは半分だ。

ただ、この攻撃でボスを激怒させたのか刀を闇雲に振り回してきた。

攻撃を防ぐこと自体は出来るが、流石にこの状況で攻撃を続ける事は出来ないと思

い、一度距離を取った。
「グオォォォ!!」
俺が離れると攻撃を止めるのと同時に今までで一番大きな砲口をあげた。
「ッ!」
俺はそれで一瞬怯み、ボスから目を離してしまった。
ただ、すぐにボスの方へと目を戻した時にはそこにボスの姿は見えなかった。
俺は嫌な予感がしてすぐにその場から走り、避けるとさっきまで居た場所をボスがクレーターを作っていた。
「おいおい、マジかよ」
さっきまでとは違って禍々しいオーラを放っていた。
それにさっきの事からＡＧＩが俺並みになってるんだろうな。
下手をすれば、俺以上かもだが……。
「これは早めに決めないとマズそうだな」
いつもなら、この程度の強化は大丈夫なのだがすでにボス戦を初めて３時間が経とうとしていた。
俺はすでに、疲労で集中力が限界に近かった。
「フゥー……さぁ～て、そろそろフィナーレといこうぜ!」

俺は大きく深呼吸をして、全速力でボスへと近付いていった。
ただ、さっきまでとは同じとはいかず、狐火の弾幕も2倍に増えていた。
俺はそれを何とか掻い潜り、隙を見て【抜刀・鎌鼬】で攻撃をしたが、今までとは違いボスはこの攻撃を避けた。
「チッ、もう当たらねぇってか!」
俺はすぐに攻撃するのは止めて近付く事に専念する事にした。
あと少しでボスへと辿りつく所で狐火を刀で斬ろうとした時、俺は不意にその場から大きく横に跳躍して距離を空けた。
すると、さっき斬ろうとした狐火はその場で爆発した。
範囲は狭いが、当たったら一溜りもない威力だった。
「マジかよ……これ以上の強化はキツいって」
このせいで無闇に狐火を斬る事が出来なくなった。
一応、良くみたら違いがあるのだが、瞬時に判断する力は今の俺には残ってない。
「ったく、もうなりふり構ってなれねぇな!」
俺は次の攻撃でボスを殺りきる勢いで全速力で走り、向かってくる狐火を全て避けていった。
そして、やっとの思いでボスの懐へと入り、【抜刀・一閃】で攻撃をしたが避けられて

しまった。
それだけではなく、反撃をしてきた。
「くッ」
一撃一撃の攻撃は重くて速い……正直、防ぐので精一杯だったが、俺は一瞬の隙を見て納刀した。
「【抜刀・反撃】！」
流石にこの攻撃は防ぐ事は出来ずにボスに諸に入った。
俺はその隙を逃さずにもう一度、素早く納刀して【抜刀・乱舞】【抜刀・一閃】で攻撃をした。
「グオォォォアァ」
この攻撃でボスのＨＰはあと少しで１割を切ろうとしていた。
流石にヤバイと思ったのかボスは一度、距離を取ろうとしたが俺はそれを許さなかった。
「逃がすかよっ【抜刀・鎌鼬】！」
この攻撃は見事に当たり、残りＨＰが１割を切った。
するとボスは膝をついて、動きが止まった。
「貰ったッ！」

俺はボスの心臓部分に刀を突き刺した。
すると、ボスと刀が光を放ち始めた。
そして、ボスと刀は光となり消えていった。
『ありがとう』
『ありがとうございます』と言いながら……。

「終わった……のか？」
俺はまだ周囲を警戒していたが、目の前にウィンドウが表示された。
『ボス、撃破』
俺はそれを見るやいなや、その場で大の字で横になった。
それもそうだ、ボス戦だけで４時間も戦っていたのだから……。
ピロリン♪
《スキル【抜刀の心得】を取得しました》
《スキル【絆の共振】を取得しました》
《スキル【暴虐者】を取得しました》
《スキル【居合の心髄】を取得しました》
うん、今は確認する気力もない。

顔を横に向けると、そこには宝箱があった。

「おっ、中身は何だろな」

俺は重い体に力を入れて立ち上がり、宝箱を開けた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【ユニークシリーズ】

単独でかつボスを初回戦闘で撃破しダンジョンを攻略した者に贈られる攻略者だけの為の唯一無二の装備。

1ダンジョンに一つきり。

取得した者はこの装備を譲渡出来ない。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【黒刃刀・影】

《ＳＴＲ＋３０　ＡＧＩ＋１０》

【破壊不可】

【影牙一閃】

【形式】

《スキルスロット：１》

＝＝＝

《スキルスロット：1》
＝＝＝

＝＝＝

・取得条件
『未練の集まり』を一回の戦闘で３０回以上倒す
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
【居合の心髄】
居合で与えるダメージが増える
上限は１０％
また、抜刀・納刀するスピードが速くなる
最大で２倍
・取得条件
自身と同等くらいのＡＧＩ持つ相手に居合攻撃を５回当てる
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
【影牙一閃】
瞬時に敵の前に移動し、斬りつく
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
【形式】
幾つかのスキルが集まったスキル
【形式】スキルの同時発動は出来ない

一式～五式までは1日累計２０回まで

【零式　門戸開放】

三分間、【形式】スキルを全て同時発動するスキル

ただし、デメリットは発動しないが、三分後に　【形式】スキルが使用不可となり、ステータスが半減する。

クールタイム終了後、元に戻る。

クールタイムは二時間

1日1回まで

【一式　怪力乱神】

ＳＴＲが二倍となり、ＩＮＴが半減する

【二式　疾風迅雷】

ＡＧＩが二倍となり、ＶＩＴが半減する

【三式　鏡花水月】

直前に見たスキルを真似する

【四式　剣山刀樹】

五本の脇差を呼び出して操るスキル

【五式　明鏡止水】

周囲のマップと生物が分かる
＝＝＝

当たった対象は一定時間、継続ダメージを受ける
一定数出すとクールタイム（１０分）に入る

【妖術・幻影】
相手に一定時間、幻を見せる
クールタイム３０分

【妖術・変化】
任意のものに化ける
消費ＭＰ　１０

【妖術・一ツ尾狐】
最大９体の一ツ尾狐を召喚する
クールタイム２時間

【妖術・千里眼】
特定の場所を見渡す事が出来る
クールタイム３０分

【妖術・吸収（ドレイン）】
触れた相手のＨＰ・ＭＰを吸収する
触れた時間で量が変化する

クールタイム1時間
【妖術・神通力】
追尾型狐火を放つ
数は【妖術・狐火】と同じ
クールタイム３０分
【妖術・貫通】
１分間、自身の攻撃に防御力貫通スキルを与える
１日３回まで
【妖術・門戸開放】
ステータス上昇が３倍に変化
３分間【妖怪変化・妖狐】スキルを無制限に使用することが出来る
その後【妖怪変化・妖狐】が強制解除されて、日が変わるまで使用不可になる
１日１回まで
＝＝＝

マジで苦労したかいがあった。

でも、流石に……

「もう疲れたから、続きは明日だ」

そう呟きながら、転移ポータルで町に戻り、ログアウトをした。

???????????????????

「おいおい、あの落武者が倒された」

「流石に早いけど、別にギミックさえ解ければ、簡単に倒されるからそんなに驚く事じゃないだろ」

「単独で倒された……」

「そ、それでも……ユニークシリーズだけ…だろ」

「いや、それだけじゃなくて……全て取られた」

「はぁ!?」

「だから、あのボス攻略で得られるスキルも全て獲得されたんだよ!」

「マジで」

コクリ

「・・・・・・・オワタ」

「オーーーイ!?」

自由気ままに原作　主人公の初登場です

あの落武者を倒した次の日、何事も無かったようにログインをした。
「あ～、そう言えば手に入れた装備を着けてなかったな」
俺は一度、人目の無い場所に移動した。
「ここなら、大丈夫だろ」
何故なら、俺は目立つのが苦手なのだ……とは言いつつもオンラインゲームをやるといつも目立ってしまう。
ＦＰＳをナイフ１本で上位に入ったり、スナイパーライフルで接近戦をして上位に入ったりくらいの対した事ない事しかやってないのに、目立ってしまうんだよな～。
それより、この装備は絶対に派手だと思っている。
さっさと装備してスキルを試してみないとな。
「んッ……」ゴシゴシ
「……おい、運営の奴らふざけてるのか、いや絶対面白がって選択したろ」
名前からして着物なのは分かっていたが、流石にこれは可笑しいだろ。

てか、髪飾りの点で気づけば良かった。ハァ～
皆ももしかしたら、予想はついていると思うが一応言っておこう。
「何で見た目が女性用なんだよ!!」
どんなものかと例えるならば、極振りのカスミの着物に似ていて、違う所は色が黒く桜の花びらの模様が入っており、下は『身喰らいの妖刀・紫』使用時の見た目だ。
分からなければ、『極振り　カスミ』で調べたら画像が出るから、そちらを参考に。
セツメイガヘタトハ　イエナイ
「予定変更、どこかに行って少し落ち着こう」
そう呟くと、なるべく人通りの少ない道で目的地の、ある店へと向かった。

「いらっしゃい。エイじゃない……ってその装備どうしたの?」
そう言うと、俺の頭の先からつま先までじっくりと見回していた。
「イズさん、聴いてくれ」
この人はイズ。
生産職のトッププレイヤーだ。
えっ、いつ知り合ったって?

それはログイン2日目の時さ。
まぁ、それはさておき俺は今までの経緯をイズさんに話した。
「へぇ～、ユニークシリーズねぇ。そもそも【破壊不可】って生産職にしては難儀ね～」
「そもそも男の俺が何故、こんな装備なのか」
ハァ
「見た目で間違えたとか」キリッ
「そりゃ、無いだろ」ナイナイ
と、自分自身は言っているが、誰が見ても今のエイを女性と間違えるだろう。
元々、顔が童顔で、眼はクリっとしていてまつ毛は長く、口も小さくツヤがあって綺麗だ。
まぁ、当の本人はそれには全く気付いていないらしい……。
ってな感じで天の声さんで～す。
たま～に、出てくるのでよろしく～。
「はぁ、本当に無いわ～」
流石に切り換えの速い俺でもこれは駄目だわ。
その後も、色々と愚痴を吐いていると、カランっと扉が開く音が聞こえた。

「あら、クロムじゃない。今日はどうしたのかしら」
　どうやら、イズさんの知り合いの様だ。
「あぁ、ちょっと大盾装備の新入りを見付けたから……衝動的に連れてきた」
　そう言うと、クロムの後ろから小さな少女が姿を見せた。
　身長は俺と同じ位だった……女性と背丈が同じとか俺的に屈辱だ……グヌヌヌ。
「可愛い子ね。さっき、衝動的に連れてきたって事は……通報しても良いかしら。どう思う、エイ」
　おいおい、なぜ俺にふる。
　まぁ、面白そうだし少し乗ってみるか。
「んまぁ、良いんじゃないか」グッ
　俺はここ一番の笑顔とグッドサインで答えた。
　それを見たイズさんもグッドサインをして、通報画面を開いていた。
「ちょ、ちょっと待てよ。あれは、言葉の綾だって」
「うふふ、冗談よ冗談」
「はぁ、心臓に悪いからやめてくれ」

「お話はこれぐらいにして、本題は？」
「この子が格好良い大盾が欲しいっていうから顔見せだけでもさせておこうと思ってな」
「成る程ね。私はイズ、見ての通り生産職よ」
「私はメイプルって言います。えっと、あの人は……」
おっ、わざと空気になりかけていたが、こっちに話を振ってくるとは、中々コミュ力高いな。
オレガコミュリョクガナイトハ　イッテナイ
「俺はエイだ。宜しくな、メイプル」
「はい……俺？」
何故かメイプルは俺の言葉に疑問を持っていた。
あっ、今の装備だとそうなるわ。ヤッベ、ワスレテタ
「えっと、こんな装備をしているが、俺は男だ」
と、説明はしたが余計に分からなくなったのか、目が点になっていた。
こりゃ、一から教えないと駄目な奴だ。
俺はイズさんに言った事を、メイプルにも話した。
「成る程……」

「ユニークシリーズか。そんなに強いのか」
　俺が話を終えると、クロムがこっちの話に混ざってきた。
「まぁ、馬鹿みたいな性能をしてるな。それとこの事は他言無用な、ゲーマーの嫉妬は面倒なんだ」
「了解だ、ゲーマーの嫉妬っては怖いからな」
　おっ、こんなにあっさりと承諾してくれるのは、説明という面倒事が減ってラッキー。
「あっ、話が逸れちゃったわね。でも、装備を創るのにお金がいるのだけど……」
「３０００Ｇで足りますか」
「それじゃ、足りないわね。最低でも１００万Ｇはないとね」
「ううっ、暫くおしゃれはお預けだなぁ」
「なら、ダンジョンに潜ってお金や装備を集めたらどうだった?ここからなら、『毒竜の迷宮』が一番近いぞ」
「うん、それが良いかも」
　それから、ここにいるメンバーとフレンド登録をし、いつでも相談に乗れるようにした。
　そしてメイプルはペコリと、お礼をしてこの店から出ていった。
「あっ、流石に一人でダンジョン攻略には行かないよな」

「流石に、それはないわよ」
その言葉にクロムも納得している様だった。
そうだよな、考えすぎだよな。ウンウン
「よっと。んじゃ、そろそろ俺もスキルを試しに外に行ってくるよ」
そう言ってイズさんとクロムと別れ、俺もこの店をあとにした。

「到着と」
いや～、流石はＡＧＩが高いだけはあるな。
移動がとっても楽。
「んじゃ、早速やりますか」
俺はウィンドウを開き、武器を装備しようとした時に気付いたんだが、刀が二本あるけど片方しか装備出来なくね!?
まさか、そんな事があるわけ……。
うん、マジでそうだった。
「何かスキルが必要なのか」
まぁ、いっか。

この見た目に対したら、小さい事だ。
おいおい、調べるとするさ。
「それじゃ、スキルを試してみますか」
１４　名前：名無しの大盾使い
???????????????????
例の刀使いと遭遇したというかフレンド登録した。ｗｗ
１５　名前：名無しの槍使い
は？
１６　名前：名無しの大剣使い
どうやって？
１７　名前：名無しの大盾使い
今日、もう一人のヤバい大盾の子と生産職の店に行ったら、そこにいた。
で、なんやかんやあってフレンド登録した。
１８　名前：名無しの魔法使い

もしかして、大盾の子とも？
１９　名前：名無しの大盾使い
勿論、しました。フレンド登録
２０　名前：名無しの大剣使い
で、刀使いの子ってどんな奴？
２１　名前：名無しの大盾使い
まぁ待て今まとめる
いくぞ
２２　名前：名無しの大盾使い
名前はエイ
パーティーは組んでいない
見た目は完全に女だったが、実際は男だった
装備も見た目は女性用だった
２３　名前：名無しの槍使い
男の娘か～。
けど、男が女性用装備って装備出来るのか？
そこんところ、どうなん？

２４　名前：名無しの魔法使い
あっ、それは俺も気になる
２５　名前：名無しの大盾使い
悪いが装備についてはノーコメントだ
本人に口止めされてるからな
２６　名前：名無しの大剣使い
それじゃ、仕方ないな
それにトッププレイヤーとなれば、自ずと情報が出てくるだろ
２７　名前：名無しの槍使い
それもそうだな

自由気ままにイベントに向けての準備です

あれから一週間が過ぎたある日。
運営から第一回イベントの予告が届いた。
イベント内容は、ポイント制のバトルロワイヤルだ。
参加者全員が、他のプレイヤーを倒した数と死亡回数で争うらしい。
それに普通のバトルロワイヤルとは違って一度、やられても時間内なら何度でも復活出来る機能があるらしい。
そして上位１１名には、限定の記念品が贈られるそうだ。
うん、どう考えても面白いに決まっている。
ただな～、俺自身は目立つのが余り好きじゃないんだよな～。
あっ、でも俺より強い奴は沢山いると思うし、余り目立たない可能性もあるか。
いや、絶対そうに違いない。ウンウン
あっ、今フラグだなって思ったやつ絶対にこれに評価しろよ、絶対にだからな……はい、ごめんなさい冗談です。

それじゃ、このイベント参加の為にレベルアップといきますか。キングクリムゾン

「よし、到着～」

俺はこの装備を手に入れた渓谷下にあったダンジョンへと来ていた。

「今のためステータスを確認しておくか」

??????????????????

ＨＰ　４０／４０

ＭＰ　４０／１０〈＋３０〉

【ＳＴＲ　９５〈＋３０〉】

【ＶＩＴ　０】

【ＡＧＩ　９５〈＋７０〉】

【ＤＥＸ　０】

【ＩＮＴ　０】

装備

頭　【深淵の髪飾り】

体　【深淵和装・桜】

右手　【黒刃刀・影】

左手　【装備不可】

足　【深淵和装・桜】

靴　【深淵の草履】

装飾品　【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

【抜刀術Ⅷ】【刀の心得Ⅷ】【抜刀の心得Ⅴ】【双龍の刃】【一撃必殺】【電光石火】【剣ノ舞】

【居合の心髄】【暴虐者】【暗殺者】【暗殺】【空中歩行Ⅵ】【跳躍Ⅵ】【隠密Ⅶ】【気配遮断

Ⅶ】【壁走りⅣ】

??????????????????

「装飾品が一つも無いな。イズさんの所で何か創れたかな」
まぁ、今さらこんな事に気付いても遅いな。
それにしても【暴虐者】がマジで強すぎだろ。
攻撃するだけでステータスバフでき、今は＋１００だからな。
流石にこれは後々、下降修正されそうだろうな。
あっ、【壁走り】はその名の通り壁を走れるスキルで【絆の共振】は武器のスキルスロットに装備しました。グッ
あと、【剣ノ舞】はアニメ見るか、自分で調べてくれ。
セツメイガメンド・・・ゲフンゲフン
まぁ、読んでるほとんどの人は説明しなくても分かるよな。
「んじゃまぁ、早速……突撃ーッ！」
俺はダンジョンに入るやいなや、スニーク関係無く敵を攻撃した。
なんせ、ここは敵の数が多いから、レベルアップには最適だ。
それに大体、スニークして倒す必要が全く持ってないかなら。
ピロリン♪
おっ、何かあったみたいだが、今は無視だ無視。

一先ず、この部屋の敵全てを倒してからだ。

……５分後

えっ、もう少し戦闘シーンを書いて欲しいって、面倒なので嫌です。

まぁ、第一回イベントはしっかりと戦闘シーンを書くのでお楽しみに。

「いっちょ上がり。ステータスの確認確認」

おおっ、レベルが３２になって新たなスキルを手に入れたな。

やっぱり、ここに来て正解だったな。

めっちゃ、効率良いじゃん。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【殺戮者】

敵を倒すとＳＴＲ　ＡＧＩ＋１％

上限１００％

取得条件：同じモンスターを連続で３０体倒す

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【アンデッドキラー】

不死系モンスターに与えるダメージが１．２５倍になる

取得条件：不死系モンスターを５０体以上倒す

＝＝＝

自由気ままに第一回イベントのお時間です

運営からのイベント告知から数日がたち、遂に今日がそのイベント当日だ。
「やっぱり、参加者は多いなぁ」
俺は目立たないように、なるべく人が集まっていない所で様子を伺っていた。
それから暫くすると、何かちっこいドラゴンが現れた。
『ガオ～！それでは、第一回イベント！バトルロワイヤルを開始するドラ！』
「「うおおおおおっ!!!」」
それを聞くやいなや、集まった者達が歓声を上げていた。
やっぱり、大人数でのこのノリは苦手だ。
別に騒ぐのが嫌いではないが、出来れば少人数で騒ぎたい所である。
『それでは、もう一度ルールを説明するドラ！制限時間は三時間。ステージはイベント専用マップドラよ！ポイントは倒したプレイヤーの数と倒された回数、被ダメージと与

ダメージで算出されるドラ！それに、倒されても時間内なら何度でも復活出来るのドラ！さらに、ポイントが高い上位１１名には記念品が贈られるから、皆頑張るドラよ？』

要するに、戦略をたてるも良し、逃げ回るも良し、何でも有りのバトルロワイヤルだな。

事前から、知っていたがやっぱりこう言うのは盛り上がるよな。

俺もかなり心が踊っていた。

「よし、最後にステータスの確認だ」

？？？

【ＩＮＴ　０】

装備

頭　【深淵の髪飾り】

体　【深淵和装・桜】

右手　【黒刃刀・影】

左手　【装備不可】

足　【深淵和装・桜】

靴　【深淵の草履】

装飾品　【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

【抜刀術Ⅹ】【刀の心得Ⅸ】【抜刀の心得Ⅷ】【双龍の刃】【一撃必殺】【電光石火】【剣ノ舞】

【居合の心髄】【暴虐者】【殺戮者】【暗殺者】【暗殺】【空蝉】【空中歩行Ⅷ】【跳躍Ⅷ】【隠

密Ⅸ】【気配遮断Ⅸ】【壁走りⅦ】【猫の眼】【アンデッドキラー】

????????????????????

結局、装飾品欄は一つも埋ることはなかった。
良いものはドロップしないし、造るのにはお金と素材が掛かるし……。
まぁ、無くても困らないから良いけどな。
後は【空蝉】のスキルは以下の通りだ。

＝＝＝

『ニィッ！ニッ！――――ゲーム、スタートドラッ!!』

そう言い終えると、辺りプレイヤーが光に包まれ、イベント専用マップへと転移された。

「ここは……森か。以外と良い場所に配置されたな」

周りを見渡していると、早速ザザッと草むらを歩いている音がかなり小さいが聞こえた。

音がした方を見ると、遠くに一人の剣士がこちらに向かって来ていた。

この距離なら、相手はこっちには気付いていないだろう。

俺は【猫の眼】でしっかりと見えてるが……。

「悪いな【抜刀・鎌鼬】」

俺の攻撃は見事に直撃し、相手は光となって消えていった。

「うし、自由にのんびりと行くかな」

俺はそう呟くと、影へと潜りその場から消えていくのであった。

それからは、見つけたプレイヤーを背後から攻撃をして倒したり、たまに【抜刀術】ス

キルで倒したりと、自由気ままにのんびりとプレイをしていた。
うん、何か単純作業になってきたな～。
誰か強い奴がいないかな……おっ。
俺は前方に大斧持ったプレイヤーを発見した
「あれは確か……ドラグ?だったか」
俺はもう少し近づき、確認するとあの独特な斧はドラグの様だった。
以前に戦っているのをこっそり見る機会があり、かなりの手練れだったから一度、戦ってみたいと思っていた相手だ。
背後から攻撃をしても良いが、折角だから真っ正面からぶつかりたいと思い、彼の前へと姿を現した。
「あんたが俺の次の相手か、お嬢ちゃん」
「まぁ、そうなんだが……」
俺は不意をつき、ドラグへと攻撃をしたが、それは簡単に受け止められてしまった。
（かなり本気でやったつもりだったんだがな～）
俺は一度、距離をあけ抜刀の構えをした。
「こんなんだが、俺は男だ」
そう言いながら……。

「ははっ、そうだったか。それは悪かったな」
そう言ってドラグも斧を構えた。
顔を見ると随分と焦りの様子が伺えた。
もしかして、俺の速さに着いて来れてなく、さっきのは苦し紛れだったのか？
まぁ、気にしてもしょうがないか。
「【一式　怪力乱神】」
俺がそう呟くと、ドラグも攻撃をしてきた。
「【土波】」
斧を叩き付けた地面が波打ち、バキバキと裂けて弾けながら、真っ直ぐに向かってきた。
俺はそれを横に跳んで回避し、スキルを発動した。
「【影牙一閃】」
スキルは見事に当たりドラグのＨＰを削りきった……筈だった。
「【バーンアックス】」
俺は思わぬ反撃をドラグから喰らいそうになった。
「チッ【三式　疾風迅雷】」
それをスキルを使い、何とか当たらずに回避する事ができたが、一瞬体勢が崩れてし

まった。
ドラグも好機と思った様で追撃をしてきた。
「【土波】！」
俺はニヤリ、と不意に口角が上がった。
やっぱり、強い奴と戦うのは心が踊るなぁ。
「【潜影】」
俺はスキルを使い、影と潜りドラグへの後ろに姿を現した。
「わりぃな俺の勝ちだ【抜刀・一閃】」
攻撃は見事に当たりドラグは光となって消えていった。
「ああ、ここが森で助かった」
それにしても一撃で仕留めたつもりだったが、何かのスキルか。
まぁ、今は気にしても仕方ないか。
そして、俺は新たなターゲットを見付けるため、闇へと姿をくらました。

……一方、観客席では
「おい、あのドラグがやられたぞ」

「マジか、どんな奴だ」
「あれだよあれ、あの着物を着た少女だよ」
「ヤバくね、倒してる速さは遅いが全部一撃で背後からやられてる」
「あんなプレイヤー初めて見た」
「あらあら、あんな楽しそうな顔でプレイしてるの初めて見たわ～」
観客席ではエイの事で話が持ちきりだった。
エイの目立たない生活はもう訪れないのかもしれない。
あっ、どうも初めまして。
ちょっと前に出てきた天の声さんですよ～、今後ともよろしくね～♪

そんな中、イベントが始まって2時間が経過しようとしていた。
残り1時間でイベント終了するなか、アナウンスが大音量で流れた。
『ガオ～!中間発表ドラ～!現在の一位は１３８０ポイントのペインさん、二位は１１５０ポイントのドレッドさん、三位は９８０ポイントのメイプルさんドラ!ちなみに3位と4位のポイント差は３００ポイントくらいドラ!これから1時間、上位三名を倒した際、得点の三割が譲渡されるドラ!三人の位置はマップに表示されるドラから、一発

逆転が狙えるドラよ！それじゃあ、最後まで頑張るドラ！』

「マジか、メイプルが三位とは驚きだな」

さてさてさ～て、どうするかな？

俺はマップを開け、確認するした。

「いや、遠すぎるだろ」

三人の位置を見ると、ここからドレッドの場所にギリギリ行けるかどうかだった。

あと、参考程度に俺の順位は４位だ。

「おっ、ラッキー。ドレッドさんがこっちに向かって来てるじゃん」

俺はこの好機を逃さないため、全速力で向かいつつ道中のプレイヤーを倒して行った。

「っと、やっと見つけた」

「まさか、前から来るとはな」

残り時間……５分……ギリギリだ。

さらにドレッドの後ろから何人かのプレイヤーが走ってきている。

「まぁ、良いさ。道を空けてくれよ」
そう言って、ドレッドはこっちに向かって斬り掛かってきた。
俺はそれを避け、一旦距離を取った。
「もう時間がないんで、一瞬でで終わらせるぜ【妖怪変化・妖狐】」
俺がスキルを発動すると、俺の姿が変化し始めた。
狐の耳と尾が生え、髪がロングまで伸び、頭の上には狐のお面を着けていた。
例えるなら、シャドウ〇ースのギンセツってカードのイラストに近いものだ。
「なんだよ、それ」
この姿を見たドレッドは、冷や汗をかいており一歩足を後退させた。
「【三式　疾風迅雷】【抜刀・電光】」
スキルを発動した瞬間、ドレットは警戒心を上げていたが、俺は既にドレッドを後ろにいた。
「なんつう速さだよ。反則的だろ」
ドレッドはそう言い残し、光となって消えていった。
あっ、次いでにドレッドを追い掛けていた連中も全員倒したした。イエーイ

『ガオ～！終了～！結果は一位と三位の順位変動はなかったドラ！二位は見事にドレッ

ドさんを倒したエイさんとなったドラ！それでは、これから表彰式に移るドラ！』

あ、やべッ。

目立たないようにするつもりが、ガッツリ目立ってしまった。

「はぁ、過ぎた事は仕方ないか」

俺がそう呟くと視界が白く染まり、気が付くと最初の広場に戻って来ていた。

ただ、上位三名は壇上の上にいる。

『では、次。エイさん一言どうぞドラ』

チビッ子ドラゴンはそう言って、マイクを渡してきたので受け取った。

「ん～まぁ、勝てて良かったです」

だから、こう言うのは苦手なんだよッ。

大人数の前で話すとか緊張するんだよ。

『ありがとうドラ！最後にメイプルさん、一言どうぞドラ』

「えっと、一杯防御できてよかったでしゅ」

あ、噛んだ。

盛大に噛んだな。

メイプルは余りの恥ずかしさに顔が赤くなり、頭から湯気がたっていた。

『これにて第一回イベント、バトルロワイヤルを終了するドラ～！』

??????????????????????

２８　名無しの大剣使い

第一回イベントヤバかったな。

２９　名無しの槍使い

そうだな

３０　名無しの魔法使い

メイプルもヤバかったけど、エイも凄かったよな。

特に最後のシーン

３１　名無しの大剣使い

あぁ、ドレッドがやられた事にも驚いたが見た目まで変化するとは思わんかった

３２　名無しの槍使い

見た目的に妖怪狐だよな

??????3　名無しの魔法使い
そうだな
??????そして、この話題はいたる所でされており、最終的に妖怪狐と呼ばれる事となった。
??????勿論、エイもとい影宮　万里は知るよしもなかった。

自由気ままにリアル話をしたいと思います

「それじゃ、お兄。先に行くから戸締まりよろしくね」
「おう、いってら〜」
あっ、どうも影宮　万里スッ。
絶賛、朝ごはんを食べています。
後、第一回イベントで二位となりました。
その代わり、あの姿がゲーム内に広がりました。ショボーン
「っと、そろそろ俺も行かないとな」
俺はさっさと身支度を済まし、戸締まりをしっかりと確認してから家を出た。
「今日はわりと暖かいな」
そう呟きながら俺は、学校へと足を進めるのだった。

家から15分位歩くと、学校が見え始めた。

かなり近くて助かっている。
なぜなら、朝早く起きなくて済むからだ。
それはさておき、俺は足早に校門を通り教室へと目指した。
ガラガラガラ
俺は教室の扉を開けると既に二人の生徒がいた。
「おはよう、理沙に楓」
「あ、おはよう影宮」
「おはよう、影宮君」
最初に挨拶を返したのは、白峯　理沙。
まぁ、簡潔に済ませるとゲーム仲間だ。
そして、もう一人は本条　楓。
彼女は良く理沙と話している友達だ。
と言っても、俺は二人とはとびっきり仲が良いって訳じゃない。
理沙がゲームについて聞いてくる時にしか、話さない位である。
俺は二人の側を通り、楓の席の二つの後ろに座り、外の景色を眺めていた。
まぁ、頭の中はＮＷＯについてでいっぱいだが。

暫くすると、楓と理沙の話し声が聞こえてきた。
聞き取れる部分を聞く限り、ゲームについての様だった。
珍しい事もあるんだな～二人がゲームの事を話しているなんて。
でも、何か聞き覚えのある単語が出てくるな……
もしかして……
「……ＮＷＯか」
「影宮もそのゲームやってんの」
急に話しかけてきた事に驚いたが、俺はきちんと返答をした。
「んまぁ、やっているが……もしかして声に出てたか」
俺の質問に二人はウンウンっと首を縦に振った。
二人の反応で俺は少し恥ずかしくなった。
つい、考えてる事が口に出るとは……。
「それじゃぁ、第一回イベントにも参加したの？」
「参加したな。一応、上位にも入れたし」
俺はそう言いながら立ち上がり、二人へと側へと近づいた。
「へぇ、やるじゃん」

「まぁ、フレンドの初心者があんなに化けて三位になるとは思わんかったけどな」
「えっ」
　楓は俺の言った事にそんなにも驚く事かと思っていたが、次に言ってきた言葉には俺も驚いた。
「もしかして……エイ君？」
「えっ、と～……もしかしてメイプルなのか？」
「うん、私がメイプルだよ」
　おいおい、マジかよ。
　ゲーム内のフレンドがクラスメイトなんて流石に世間が狭すぎだろ！
「そ、そうか。あぁ、俺がエイだよ」
「えっと、話に着いていけないんだけど……」
　俺達は、理沙に俺らの関係を話した。
　最初は驚いていたが、話を聞いているうちに呆れ顔になっていた。
「取り敢えず、二人はＮＷＯ内でフレンドでエイこと影宮は第一回イベントの二位、メイプルこと楓は三位」
「そうだね」
「はぁ、全く世間って狭いね」

「同感だ」

それから、お互いの素性が分かり、俺達はＮＷＯでどんな事をしていたのか話していた。

それにしても、楓のプレイは毒竜を食べて倒したり、虫を食べてスキルを得たりと、誰もが異常だと思う事を、楓自身は平然とやっていると言うか普通にプレイしていると思っている。

これが真の天然の力なのか……。

にしても……

「化け物性能だろ」

「流石は楓。けど、影宮も結構チートな性能をしていると思うよ……ぷっ」

「おい、コラ。いつまで笑ってるんだ」

原因は勿論、俺の装備についてだ。

楓だけが話すのも不公平だと思い、俺についても話したが、スキルの方は別に何とも無かったが、案の定装備のせいでこうなった。

まぁ、遅かれ速かれバレる事は分かっていたので、それが早くなっただけだ。

「もうこの話は良いだろ」

正直、この話題は俺のメンタルが持たん。

ただ、暫くはこのネタで弄られそうだ…。
「でも、追い付くのが大変そうだな～」
「でも、私達の真似をすれば……」
「二人は二人、私は私。二人が見つけたスキルを掠めとる気はないよ。まぁ、異常なスキルを手に入れる糸口は仕方なかった事で」
「それで理沙はキャラの方針は決まってるのか」
「う～ん……よし、決めた。私は『回避盾』になる」
回避盾。
敵の攻撃を引き付けて回避して実質攻撃の無力化する。
かなり難しいが、理沙なら大丈夫だろ。
なんせ、ＰＳお化けだからな。
「あっ、影宮　今なんな失礼な事を考えてたでしょ」
「別にソンナコトナイゾ」
「じゃ、何で目をそらすの」
「気のせいだ」
「でも、盾なら私がやるよ」
「ちっちっちっ、私と楓がパーティーを組んだらどんな戦いもノーダメージの無敵パー

ティー。どう、面白そうでしょ」
楓は理沙が言ったこと想像したようで、目がキラキラしていた。
「いい！それ、凄く格好いい！」
「盛り上がっているとこ悪いが、それは無理かも知れないな」
「えっ、どうして」
楓は俺の言った事にかなり驚いていた。
まぁ、無理もないだろう。
「今回のイベントでかなり目立ったうえ、ノーダメージだろ。運営が何かしらメイプル対策をしてくるんじゃないか」
「それはあるかも」
理沙の奴は俺の言った事に納得していた。
楓での奴は少し……いや、かなりショックを受けていた。
まぁ、俺が撒いた種だ……仕方ない。
「でもまぁ、普段はダメージを受けず、何かしらのメイプル対策でダメージを受けてもなお、倒すことが出来ない。ってのも面白いと思うけどな」
俺が言った事を楓は想像したようだ。
さっきまで落ち込んでいたのに、急に元気になったのだから。

「それもいい！何か無敵感が増した気がする！」
「うん、それも良いかもね」
どうやら、二人は気に入った様だ。
にしても、楓のやつコロコロ表情が変わって見てて飽きないな～。
それから、俺達は何気無い会話をするのであったが、これだけ同じゲームの事で身近な人と話すことが無かった。
でもまぁ、
「こう言うのも悪くないか」
「影宮くん、何か言った？」
「いや、何でもない」
俺は不意に時計を見ると、もうすぐ他の生徒が来る頃だと思い、席に戻ろうと思った時、理沙がこっちに話を振ってきた。
「ねぇ、影宮は今日ゲーム内で予定とかある」
「いや、特に無いが」
「なら、初期位置の広場に来てくんない」
「別に構わないぞ」
すると、ガラガラと扉を開ける音が聞こえ、続々とクラスメイトが入ってきた。

「んじゃ、またアッチでな」

そう言って俺は自分の席へと戻った。

別に二人と話している事が見られるのが嫌って訳じゃない。

ただ、この二人は結構この学校で有名だ。

だから、二人といると必然と目立って仕舞うのだ。

毎回の様に言っているが、俺は目立つのが好きじゃないからな。

決してフリじゃない。

えっ、何故二人が有名なんだって、勿論学校での有名って言えば、可愛いからに決まってんだろ。

ただ、影宮本人は知らないようだが、彼もこの学校ではそこそこの有名人ではある。

勿論、『男なのに見た目が完全に女』ってな感じで……。

?????ｂｙ　天の声

自由気ままに地底湖に向かいます

「あの二人はまだのようだな」

俺は今、理沙の言われた通り、初期位置の広場にいる。

来るまで、イベント中に上がったスキルでも確認しておくかな。

???????????????????

ＨＰ　４０／４０

Ｌｖ３５

ＭＰ　４０／４０〈＋３０〉

【ＳＴＲ　１００〈＋３０〉】

【ＶＩＴ　０】

【ＡＧＩ　１００〈＋７０〉】

【ＤＥＸ　０】

【ＩＮＴ　０】

装備

頭　【深淵の髪飾り】

体　【深淵和装・桜】

右手　【黒刃刀・影】

左手　【装備不可】

足　【深淵和装・桜】

靴　【深淵の草履】

装飾品　【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

【抜刀術Ｘ】【刀の心得Ｘ】【刀の極意】【抜刀の心得Ｘ】【抜刀の極意】【二刀流】【双龍の刃】【一撃必殺】【電光石火】【剣ノ舞】【居合の心髄】【暴虐者】【殺戮者】【暗殺者】【暗殺】【空蝉】【空中歩行Ⅷ】【跳躍Ⅸ】【隠密Ｘ】【気配遮断Ｘ】【壁走りⅦ】【猫の眼】【アンデッドキラー】

「おっ、新しいスキルがいくつか増えてるな」

【刀の極意】は【刀の心得】の【抜刀の極意】は【抜刀の心得】の上位スキルだった。

取得条件はどちらもスキルレベルをXにする事だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【二刀流】

刀のみ二刀装備が出来るようになる

ＳＴＲ　ＡＧＩ　＋２０％する

取得条件

初期装備で刀を選択する。

ＶＩＴ・ＩＮＴが０であることを満たしてる時に【刀の心得Ｘ】を取得する

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「って、事は……」

遂にもう一つの武器が装備出来るようになりました。ヤッタゼ

俺は早速、もう一本の武器を装備した。

そう言えば、刀の事は説明してなかったな～。
【黒刃刀・影】は鞘は黒いが小さく牡丹の花が幾つか描かれており、刀自体は黒くシンプルなものだ。
【黒刃刀・月】は鞘は同じもので、刀自体は逆に白くこっちは脇差しだった。
しかし、只の白ではなく、霧や霞みたいな優しいふわりとした白色だ。
うん、俺も何を言ってるか分からん。
ほんの少し灰色掛かった白って言った方が分かりやすいのかな。
うん、説明が下手すぎるw

俺はふと顔を上げると、知り合いの一人と初期装備のメイプルが来たのでウィンドウを閉じた。
「エイくん、お待たせ」
「あぁ、メイプルとえっと……」
「サリー。よろしくねエイ」
理沙を反対にして、サリーか。
うん、安直だな……理沙らしいな。
「あぁ、それで何をするんだ？」

「メイプルが新しい盾の為に素材がいるから、私はメイプル着いていくんだけど……」
「俺もそれに同行しろと」
「話が早くて助かるわ。それでどうなの？」
「構わないぜ。んじゃ、早速行くか」
俺は立ち上がり、目的地へと向かった。
勿論メイプルは時間短縮の為に、俺が背負っていた。
今思ったが、まさかこれを俺に押し付ける為にに呼ばれたりしてないよな。
うん、違うと思いたい。

「よし、到着」
俺はその場でメイプル降ろした。
前方を見ると反対側が見えない位、大きな湖があった。
確か、地底湖って言ったかな。
「湖か」
「そう、メイプルがここにいる白い魚の鱗がいるんだって」
「って事は釣りをするのか」

「まっ、そう言う事～」
そう言う訳で、三人で釣りを始めた。
そして1時間ほど続けたが、うん……結果的に全くって言うほどではないが、ほとんど釣れなかった。
サリーが１２匹
俺とメイプルが３匹ずつ
「もしかして、ステータスが関係してるのか」
「多分ね、さっき【釣り】スキルをゲットしたけど、条件がＤＥＸ２０以上だって」
「仕方ない潜るか。それなら、ＤＥＸも関係ないだろ」
「そうね、私もそうする。じゃぁ、メイプル留守番よろしくね」
「行ってらっしゃい、二人とも」
俺らはその言葉を聞いてから、湖へと飛び込んだ。
そして、暫く水中で狩りをしていると【水泳】と【潜水】のスキルを覚えた。
特に戦闘には使わないだろうが、今回みたいな素材集めでは重宝するスキルだ。
そして、また一時間ほど経った辺りで俺は一度、地上へと戻った。
「ぷはっ」
「ぷはー」

俺が水面から顔を出した直後、サリーも水面から顔を出して戻ってきた。
「二人ともお帰り～」
俺らはインベントリからメイプルのお目当ての白い魚の鱗を取り出した。
二人で大体、２００枚近くあった。
「これを貰っていいの」
「私はいらないし、今度私の手伝いをしてくれるのと引き換えで」
「俺も必要ないから構わないぜ」
「ありがとう、二人とも」
そう言ってメイプルはそれをインベントリへとしまった。
「それでエイ、聞きたいことがあるんだけど」
「なんだ？」
「今、見つかってるダンジョンって確か3つだけだよね」
「明確になっているのは、3つだけだな」
俺が見つけたダンジョンはいつの間にか、トッププレイヤーの人達が見付けた事により、世間に知れ渡っていた。
ただ、その場所を知るにはあるイベントを受けないといけない事を初めて知った。
その時、運が良かったんだな俺っと思った。

「って事は、ダンジョンでも見付けたか」
「本当なの！サリー」
「多分、地底湖の底に小さな横穴があった。ただね……」
「ユニークシリーズ狙いで一人で攻略したいって言いたいんだろ」
「流石はエイ、鋭いね」
「でも、未開のダンジョンなうえ、初回ソロ攻略はかなりの高難易度だぞ」
「上等よ。更にそっちの方が燃える」
サリーの目には信念の炎が宿ってるかの様に、やる気に満ちており燃えていた。
まぁ、サリー事だしそう言うと思ったよ。
全く無茶な事が大好きな奴だよ。
あ、勿論物理的に燃えてる訳じゃないからな。
「じゃぁ、私がここまで来るの手伝うよ」
「ありがとうメイプル、頼りになる～」
「えへへ～」
「それじゃ、俺は陰ながら応援しているさ」
そして、メイプルの協力を得られたサリーは、スキルレベルを上げるため、再び湖へと潜っていった。

「んじゃ、俺はそろそろ落ちるわ。またな、メイプル。サリーには頑張れって伝えていてくれ」
「うん、分かった。今日はありがとうね、エイくん」
「それと、俺の事は呼び捨てで良いからな……君付けは何かむず痒いわ」
「分かったよ、エイ」
そう言ったメイプルはとびっきりの笑顔を魅せてくれた。
それを聞いた俺はウィンドウを開き、ログアウトボタンを押した。
てか、最後の笑顔は反則だろ。
めっちゃ、可愛い過ぎだろ。
一瞬、ドキッとしちまったやん。

自由気ままに第二回イベントに向けて

サリーの一件から一週間が経った頃、運営から告知が発表された。
それは勿論、第二回イベントの開催についての内容であり、開催日は一ヶ月後となっていた。
それと、今回の第二回イベントはゲーム内の時間を加速させるようで、加速させている間の途中参加と退場は出来ないそうだ。
現実では2時間、ゲーム内では七日間となる予定らしい。
そのため、イベント二週間前に大型アップデートがある。
そう言えば、ついこの前に第二層が解放され、クロムと臨時パーティーを組み、鹿？見たいなボスを倒し二層行きも果たした。

そんなこんなで俺は今、メイプルとサリーの二人と待ち合わせをしている。
「エイ、お待たせ。待った？」
「いや、俺もさっき来たとこだ。んで、話って何だ？」

この時、サリーが初期装備から青がメインの見た目に青い双剣の装備に変わっていた。
どうやら、無事にダンジョンを攻略し、ユニークシリーズを手に入れた様だ。
流石はサリーと言った所だな。
「立ち話もなんだし、お茶にしながらでもしましょ」
「まぁ、別に構わないぞ」
「それじゃ行こ～」
俺達は少し歩いたカフェに入った。
そう言えば、ゲーム内のカフェとか初めて来たな。
そして、注文やなんやら済ませ、本題へと入ることにした。
「そんで、話って何だ？この後に行きたい場所があるから手短に頼む」
「そうなの、じゃ単刀直入に言うと今度のイベントで私達とパーティーを組まない」
「あぁ、良いぞ」
「ほんとっ！」
そう言ってメイプルが身をのり出し、顔を近付けてきた。
近い近い、少しドキッとしただろ。
「本当だ本当、だから座れ……な」

俺がそう言うと、大人しく元の位置へと戻った。
それにしても、今日のメイプルは何かいつもより機嫌が良くないか。
物凄くニヤニヤしてるし。
「なぁ、サリー。メイプルの奴どうしたんだ」
「えっと……」
何故かサリーは此方から目を反らし、返答に困っているそうだった。
「気を使う必要はないから、答えてくれないか」
「まぁ、そこまで言うなら……これを見てみ」
そう言ったサリーはパネルを操作して、ある動画を見せてくれた。
「ほぉ」
サリーが見せてくれたのは、第一回イベントの映像で格好いいＢＧＭに合わせてメイプルの姿が映っていた。
「あ～、これが原因であぁなってる訳か」
「そんな感じかな……それと」
サリーは再びパネルを操作して違う動画を見せてきた。
「ヘッ!?」
俺はそれを見た瞬間、変な声を出してしまった。

何せ、メイプルと同じ様な動画が俺自身がメインで映されていた。
「どうしてこうなった……」
「えっと……」
サリーからの話を聞く限り、運営が前回のイベントで上位三人となったプレイヤーの見所集みたいな切り抜き動画を作成して流しているらしい。
なので、ペインさんの動画もきちんとあるようだ。
「それにこれを見てくれる」
そう言ってサリーは、動画の残り数秒の所を俺に見せてきた。
それは俺がドレッドを倒したシーンだった。
「このシーンが……」
「まだ、先があるから見てて」
俺はサリーの言う通り、動画の続きへと目をやった。
それはカメラ目線でこっちを見る妖狐状態の俺の姿が映っていた。
うん、これは本人でもゾクッとするわ。
てか、そんな顔してたのね、俺……。
そう言えばあの時にキラッと光ったものがあって、そっちに視線を向けたな。
あれはカメラだったのか。

「この最後のシーンが結構人気でね」
サリーは俺に追い討ちをかけるかの様に、この動画のコメントを見せてきた。
うん、ヤバイね。
内容はうん、俺のメンタルが持たないので、皆さんのご想像にお任せしまぁ～～～す。
「まぁ、こんな感じで男女問わず大人気だよ。今更って感じだけど」
「マジかよ」
サリーは俺の言葉に肯定する様に、首を縦に振った。
何か大変な事になってしまった。
「これで必然的に目立つ事になるね。けど、結構目立ちたくないって言ってるわりには行動は矛盾してるよね、エイって」
「気付いた時にはいっつも遅いんだよ」
「ゲーム内では、いつも目立ってたもんね」
「はぁ、結局こうなるのかよ」
それからは、注文したものが来たので、それを食べながら俺達は雑談や第二回イベントの事について話し合っていた。
そして、話を始めてから３０分位が経った。
「っと、俺はそろそろ行くわ」

「そう言えば、予定があるって言ってたね」
「あぁ、【超加速】を手に入れにな」
「エイはまだそのスキル取ってないのね」
「あぁ、それじゃ第二回イベントの時にな」
「うん」
俺達はイベント直前まで各々で準備を進める事になった。
そして俺は【超加速】を手に入れる為に、森の奥にあるログハウスに向かうのだった。

「ふぅ、到着っと」
此処に来るのに２０分ほどかかった。
最後にルートの確認がてら、遠回りになるがその道を通ってきたから案外時間が掛かってしまった。
俺はふぅと一息つき、コンコンっと扉をノックした。
すると、扉が内側から開かれ、杖をついて白い髭を長く伸ばした老人が現れた。
「こんな所に人が来るとは珍しい……取り敢えず、上がっていきなさい。この辺りは厄介なモンスターも多い」

そう言って老人は俺を中へと通した。
中には最低限の家具と確かな存在感を放つ古びた短剣があった。
そして、俺は老人の言われた通り、近くにあった椅子へと座った。
「飲むと良い、少しは体が暖まる筈だ」
そう言って老人は目の前にお茶の入った湯呑みを置いた。
俺はお礼を言い、それを飲んだ。
特に変化は無かった……と言っても本来ならＨＰとＭＰが全快するのだが、俺は両方とも元々全快状態だからな。
「ふむ、暫くここで休んでおくと良い。ワシは【魔力水】を汲んでくるよ」
老人はそう言って立ち上がるも、足取りが悪そうに杖を頼りに歩き始めた。
どうやら、足の調子が良くない様だ。
「なら、俺が代わりに汲んでくるよ」
「そうか。ここはお言葉に甘えておこうか」
そして、老人は俺にガラス瓶を渡してきた。
それを受け取ると同時に、クエストの受託画面が表れた。
勿論、ＹＥＳだ。
クエスト内容は……まぁ、説明しなくても皆知ってるよね。

それと、この辺りに生息するモンスターも一々説明しなくても大丈夫だよな。
まぁ、知らないって場合は他の作品を読めば分かると思うから、そちらをどうぞ～。
あっ!!!決して説明が面倒な訳じゃないからなッ。
「んじゃ、行ってくる」
「すまないな」
そして俺はログハウスを飛び出し、泉へと向かった。
まぁ、普通に走って２０分でこの泉まで来ることが出来た。
俺はガラス瓶に【魔力水】を注ぎ、インベントリにしまうと明らかに森の様子が変わった。
イベント通り、モンスターが増加した。
「んじゃ、【跳躍】【空中歩行】！」
俺はスキルを使い、森の上空を通っていく。
あっ、ズルいとか言うんじゃないぞ。
ただ、森のモンスターは追い掛けて来ている。
そして【空中歩行】の効果が切れたので一度、地面へと降りたのと同時にスキルを発動した。
「【三式　疾風迅雷】」

これでさっきまで追い掛けてきたモンスターはまけた筈だ。
でも、更に速度を上げる為にスキルを発動した。
「【妖怪変化・妖狐】」
そして、更に早い速度で地面を駆け巡った。
それからは、前方にモンスターの集団を見付けると【空中歩行】と【跳躍】で避けたり、【潜影】で影に潜り通り過ぎたりしてやり過ごしていた。
しかし、道のりの半分を過ぎると、前方に大量のモンスターが確認できた。
でもなぁ……。
「あの数はいすぎだろ！」
確認できる数で1万ほどいるだろう。
あぁでも、あのスキルの実験台となるか。
俺は《黒刃刀・影》を抜き、刃先を前方に向けてスキルを発動した。
「【絆の共振】！」
すると前方に極太のレーザーを放った。
イメージてきには、魔理沙のファイナル・マスタースパークに近いだろう。
「これヤバイな。使い所を考えないとな」
スキルが収まり、前方を確認するとさっきまでいたモンスターや木々が全て消えてい

た。
「取り敢えず、先を急ぐか」
俺は刀を納刀して、再び走るスピードを上げた。
そして、なんやかんやでログハウスまで戻ってきた。
結果は【魔力水】を汲んでから、２５分で戻ってきた。
「戻ったぞ」
「おおっ、随分とは早かったの」
俺は老人にガラス瓶を渡した。
「お礼をせねばならんの。少し待っておれ」
老人がそう言うと、一つの巻物を取り出して机の上へと置いた。
「スキル【超加速】を覚えられる。役に立つはずだ……遠慮は要らん」
そう言うと老人の姿が霞んで消えていった。
「わしには必要無い物だ」
俺は背後から声がして振り返ると、そこには悪戯が成功した少年の様な嬉しそうな笑みを浮かべる老人がいた。
「ふふ……精進するといい」
そう言い終えると、静かに消えてった。

俺は机の上の巻物を開いた。

ピロリン♪

《スキル【超加速】を取得しました》

「取り敢えず、目的のスキルは手に入れたな」

俺はログハウスと出ようと扉に向かった瞬間、目の前にウィンドウが表れた。

「これは予想外だったな」

《　ＥＸクエスト　更なる高みへ

を受けますか？

ＹＥＳ　　ＮＯ　　》

クエストの受託画面であった。

自由気ままにＥＸクエストに挑戦します

「ＥＸって事はかなり珍しいクエストだよな」

条件は【走駆のお使い】を３０分以内でクリアって、余裕で条件満たしてますやん。

あっ、どうも。

思わぬクエストが出てきてびっくりしている影宮　万里ことエイです。

「受けるのは良いとして、ちょっとステータスの確認を……」

エイ

Ｌｖ４０

ＨＰ　４０／４０

ＭＰ　１０／４０〈＋３０〉

【ＳＴＲ　１１０〈＋４０〉】

【ＶＩＴ　０】
【ＡＧＩ　１１０〈＋１００〉】
【ＤＥＸ　０】
【ＩＮＴ　０】

装備

頭【深淵の髪飾り】
体【深淵和装・桜】
右手【黒刃刀・影】
左手【黒刃刀・月】
足【深淵和装・桜】
靴【深淵の草履】
装飾品【空欄】
【空欄】
【空欄】

スキル

【抜刀術Ｘ】【刀の心得Ｘ】【刀の極意Ｖ】【抜刀の心得Ｘ】【抜刀の極意Ｖ】【二刀流】【双龍の刃】【一撃必殺】【電光石火】【剣ノ舞】【居合の心髄】【暴虐者】【殺戮者】【暗殺者】

【暗殺】【超加速】【空蝉】【空中歩行Ｘ】【跳躍Ｘ】【隠密Ｘ】【気配遮断Ｘ】【壁走りⅧ】【猫の眼】【潜水】【水泳】【アンデッドキラー】

??????????????????????

未だに装飾品が無いって？……気にするな。

それとスキル【形式】の零式はやっと解放できたがスキル【妖怪変化・妖狐】の門戸開放はまだ解放できていない。

後、スキル【暴虐者】のプラス値は２００だ。

「んじゃ、いっちょ行きますか」

俺はステータス画面を閉じ、クエストのＹＥＳの所を押した。

すると俺は光に包まれ、見知らぬ白い空間へと転送された。

「ここは……」

「ここは我の試練の間。お主が今回の挑戦者か」

俺は声がした方を見ると、そこには空を飛んでいる烏天狗がいた。

「まぁ、そうだろうな」

俺がそう答えると奴は笑みを浮かべ、話を進めた。

「我は烏天狗一の神速の持ち主、名を風丸。いざ尋常に勝負」
奴……風丸がそう言うと刀を取り出し、目の前から姿を消した。
俺は少し驚いたがその場で抜刀の構えをし、スキルを発動させた。
「【抜刀・反撃】」
再び説明すると、このスキルは敵の避け、攻撃をするカウンターの抜刀スキルだ。
しかし、〃〃相手が自分よりＡＧＩが高い〃〃と失敗に終わったり、防ぐだけになったりする。
「がはっ」
俺は背後から攻撃を喰らってしまい、地面に転がった。
しかし、すぐに立ち上がり次の攻撃に備えた。
ただ、ＨＰが減ってないのを見ると【空蝉】が発動したのだろう。
なんとか首の皮一枚繋がったが、今度は防ぎようがなく、喰らったらおしまいだ。
それに【抜刀・反撃】が全く発動しなかった事から、風丸のＡＧＩは俺よりかなり高い。
てか、あの速さにノーダメージってクリア完全に無理ゲーだろ。
「これは出し惜しみをしている場合じゃないな。【妖怪変化・妖狐】【三式　疾風迅雷】【抜刀・反撃】」

俺は今できるスキルでＡＧＩを限界まで強化した。
正直、これで防げなければ終わりだ。
そのうえ、こっちからの攻撃は当たらないだろう。
「ぐっ」
「ほう、次は何とか攻撃を防げたか。だが、これならどうじゃ【迅風】」
すると、風丸はさっきよりも速い速度で動き回っていた。
これは万事休すって感じだな。
「くそッ」
それからは一方的に攻撃をされたが、ギリギリ防ぐ事に成功している。
まぁ、ほとんど直感と音で何とかなってる感じだ。
正直、このままだと俺の集中力が切れておしまいだ。
「何か無いのか、この状況を打破する術は。くっ」
とそう呟いた瞬間、俺はあるスキルが頭の中に浮かび上がった。
俺は何の迷いもなくそのスキル叫んだ。
「【零式　門戸開放】！」
すると、俺の周りに五本の刀が現れた。
そしてもう一つスキルの名を言った。

「【迅風】」
勿論、俺はこのスキルを取得してはいない。
だが【四式　鏡花水月】のおかげで一時的、使うことが出来る。
「なるほどこう言うスキルか」
スキル【迅風】は自分のＡＧＩを上げるのではなく、周囲の者のＡＧＩを下げるスキルだった。
「ぬぅ」
風丸が動きを止めた。
それもそうだろう、俺の周りには五本の刀があり、【迅風】の影響を受けているのだから。
「ただ、こちとらタイムリミットがあるんでな。【跳躍】【空中歩行】！」
俺は空中にいる風丸に向かって斬りかかった。
風丸は案の定、それを回避し距離を空けた。
「逃がすかよ」
俺は三本の刀を風丸に向けて放った。
流石にこれは予想外だったのか、全て刀で弾き返した。
「まだだ」

俺は残った二本の刀と弾かれた刀を同時に操り、風丸に向かわせた。
それでも奴には届かず、今度は刀全てを壁や地面にまで突き刺さる様に弾いた。
それで良い、一瞬でも隙をつければ……。
「喰らえぇーッ」
そう叫びながら、風丸の背後から刀を振り下ろした。
「ぐっ」
それは風丸に当たり、地面へと叩きつけられた。
「くそ、流石はＥＸクエストのボスって言った所か」
奴は攻撃を直前で刀で防がれてしまい、見た感じノーダメージの様だ。
「流石はここまで来るだけはある。だがこれを防ぐ事は出来るかの」
風丸がそう言うと突然姿を眩ました。
「なっ！」
俺は周囲を見渡したが何処にもいなかった。
が、嫌な予感がし俺はその場から横にとんだ。
すると、俺がいた場所に風丸が刀を振り下ろしていた。
そう言えば、前にもこんな事があったな。
「今のを避けるのか。だが、次はどうじゃ」

そして、風丸は再び姿を眩ました。
「落ち着け、俺」
俺はふぅと一息ついてから目を閉じた。
集中しろ。
風丸は消えた訳じゃない。
何かしらの方法で姿を消しているだけだ。
音、風の音や動き、あらやる情報から奴の攻撃を予測しろ。
そして……攻撃をしてくる場所さえ分かれば、造作もない!!!
ザクッ
「お見事、お主の勝ちじゃ」
俺は見事、風丸の攻撃を予測し一太刀浴びせる事が出来た。
そして風丸の姿が光となりその場から消えていった。
「成る程な、そう言うクエストで助かった」
多分、このクエストのクリア条件が風丸に一太刀喰らわす事なんだろ。
ピロリン♪
《スキル【心操】を取得しました》
《スキル【疾風ノ舞】を取得しました》

そして俺は再び光に包まれ、気付いたらあのログハウスの中に戻っていた。
「久しぶりにあそこまで集中したら、疲れたぁ～」
取り敢えず、俺はさっき手に入れたスキルを確認する為にステータス画面を開けた。

＝＝

【心操】
５秒間先の未来を見ることが出来る
１日３回
取得条件
目を閉じた状態でＡＧＩが２００以上の敵に攻撃を当てる

＝＝

【疾風ノ舞】
常時、ＡＧＩ＋５０％する
攻撃を回避するたび、ＳＴＲ　ＡＧＩ　＋１％する
上限１００％
緑色のオーラが発生する
取得条件

《ＥＸクエスト　更なる高見へ》をクリアする

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

何かまたぶっ壊れスキルを手に入れた気がするけど、まぁ良いや。

俺はウィンドウを閉じ、このログハウスから外に出て、町へと戻った。

何かと今日は色々と有りすぎたな～。

??????????????????

「リーダー、あの烏天狗がクリアされた」

「はぁッ、あのＡＧＩが１５００ある俺達の害悪モンスター烏天狗がか。誰にやられた」

「例のプレイヤー、エイです」

「またあいつか」

「でもまぁ、【疾風ノ舞】だけなら許容範囲だろ」

「えっと……【心操】も取得されました」

「……マジカ」チーン

「リーダぁぁぁぁーーッ」

自由気ままにスキル修正と第二回イベントの始まりです

「……遂に来たか」
「……来ちゃったね」
「あう～」
俺が例のスキルを手に入れたから、特に何事もなくメンテナンスが行われた。
そして今、メンテナンスが終わり俺達三人は、以前来たカフェでメンテナンス内容を確認していた。
内容は、一部スキルの弱体化とフィールドモンスターのＡＩ強化。
そして、防御貫通スキルの増加とそれに伴った痛みの軽減である。
一部のスキル弱体化についてはゲームの仕様上所持している本人にしか分からないが、俺とメイプルのスキルは弱体化の対象になってしまっていた。
俺の対象となったスキルは【暴虐者】だ。
修正内容は上限の追加でプラス２００までになってしまった。
正直、ステータスが上げれなくなったうえ、少し下がるのは残念だ。

けどまぁ、上限なしってのが元々強かったし、これぐらいが妥当だろ。
メイプル方は大盾に付与したスキル【悪食】が
１日１０回の回数制限が追加された代わりに吸収できるＭＰが二倍となった。
実質メイプルの弱体化となった。
「１０回全て使ったら、唯の大盾ね」
「うぅ……唯の大盾」ショボン
次にＡＩの強化は……まぁ、簡潔に言うと性能が良くなった。以上
あとは完全に、第二のメイプルを発生防止だよな。
「最後に防御貫通スキルの増加は……エイの言った通りね」
「今後はＨＰを上げるスキルや装備、後は回復系も必須だね」
「それと普通に手に入る大盾向きのスキルもな。メイプル、パーティー向けの大盾スキルは持ってないだろ」
「あう～」
メイプルは俺の指摘にガックリと肩を落とし、机に顔をのっけていた。
何だよ、その顔……可愛いな、おい。
ってそんな場合じゃないな。
それに、第二回イベントでパーティーを組む以上、そう言ったスキルは必須である。

メイプルにはイベントまでにしっかりと身に付けて貰わないとな。
「まぁ、それは追々考えるとして折角集まったんだし、どこかダンジョンでも行かない？」
「そうしよ～！エイも良いよね」
「まぁ、良いぞ」
そして、俺達はカフェを後にして町の外へと向かった。

「【スラッシュ】」
「【抜刀・一閃】」
俺達は今、外で手頃な洞窟を見付けたのでそこを探索していた。
「ねぇ、エイ。その蒼と翠のオーラは何なの」
俺がモンスターの攻撃を避けた事により、スキルが発生したのをサリーが指摘してきた。
「あぁ、これはスキル【剣ノ舞】と【疾風ノ舞】のエフェクトだよ。【剣ノ舞】は攻撃を避けるとＳＴＲ＋１％して、【疾風ノ舞】は攻撃を避けるとＳＴＲ　ＡＧＩ＋１％するスキルだ　」
「私もそのスキルほしいな～」

「【剣ノ舞】なら、レベル２５まで攻撃が一度も当たってないなら手に入るぞ。【超加速】を持ってるなら【疾風ノ舞】は諦めろ」
「へぇ～、ありがとう」
「やっと追い付いた～、酷いよ二人とも」
そう言えば、モンスターを発見したからメイプルを置いて来てたな。
でもまぁ、
「やっぱり、その鎧にその盾は似合わないな」
「仕方ないよ、素材が足りなくて盾しか作れなかったんだから」
今、メイプルが持っているのは、いつもの黒い大盾ではなく、イズさんに前々から造って貰っていたらしい白い大盾だ。
まぁ、これで【悪食】が節約出来るからな。
「メイプルも追い付いたし、先に進もう」
それから、一時間ほどここの洞窟を探索してみたが、特にお宝があるわけでもなく、レベルだけが上がった。
まぁ、メイプルが基本的な大盾スキルが手に入れられた事だし、良かったか。
??????????????????

そしてイベント当日

えっ、時間が飛びすぎだって。

細かい事は気にするな、剥げるぞ。

『ガオ～！今回のイベントは探索ドラ！目玉は転移先のフィールドに散らばる３００枚の銀のメダルドラ！これを１０枚集めると金のメダルに、金のメダルはイベント終了後にスキルや装備品に交換できるドラ!!』

あのチビッ子ドラゴンのアナウンスが流れた後、ウィンドウが開き金と銀のメダルが表示された。

第一回イベントで贈られた記念品はこの金のメダルと一緒だった。

『それと前回イベント１１位以内の方には金のメダルを既に一枚所持しているドラ！倒して奪い取るもよし、我関せずと探索に励むもよしドラ！』

これで少なくとも上位入賞者は景品を一つ手に入るが、他の連中に狙われやすくなったな。

それと、そのフィールドには幾つかの豪華なアイテムが眠っている様だ。

『死亡して落とすのはメダルだけドラ！装備品はいくら死んでも落ちないから安心する

ドラよ。メダルもプレイヤーに倒された時だけドラ！だから、安心して探索に励んで欲しいドラ！死んだら、それぞれの転移時初期地点にリスポーンされるドラよ！』

って事は、プレイヤーは探索に力が入るだろうし、上位入賞者の俺達を狙って来るプレイヤーが更に多くなるだろうな。

うわぁ、面倒くせぇ。

『今回の期間はゲーム内期間で一週間、時間を加速させているドラ！ゲーム外での時間経過は二時間ドラよ！フィールド内にはモンスターの来ないポイントが幾つもあるからそれを活用するドラ！』

休息を取ろうとしても、プレイヤーから狙われる可能性があるのか。

それだと、夜もおちおち寝られないな。

まぁ、何とかなるか。

『それでは、イベントスタートドラ!!』

その合図と共に、此処に集まっていたプレイヤー達は光に包まれ、フィールドに転移されていった。

「ここが俺達のスタート地点か」

「そうみたいだね」

三人がいたのは開けた草原のど真ん中だ。
空には重力の影響を受ける事なく浮遊する島々が見え、遠くの方には山岳地帯なども見えている。
そして広く、澄み渡る大空を竜が優雅に飛ぶ姿も見る事が出来た。
運営が用意した今回のフィールドは自然豊かなモンスター達の理想郷。
誰もが夢見た事のあるファンタジーの世界を写し取ってきたような幻想的な世界だった。

自由気ままに第二回イベントを楽しみます

「メダル、中々見付からないね」
「そうだな」
「それに歩いても歩いても、草原ばっか」
イベントが始まってから、はや二時間が経とうとしていた。
その間にメダルは一枚も見付からず、出会うのはモンスターばかり。
風景も変わりなし。
「いっその事、メイプルを背負って走るか。なぁ、メイプル……あれ」
「お～い。サリー！エイ！下下」
俺とサリーはメイプルの声がした場所の地面を触ろうとしたが、手が通り抜けていった。
俺は一度手を戻し、顔を入れたらそこには大きな空洞があり、そこにメイプルはいた。
「奥に続く道があるけど、どうする？」
「だそうだ、どうするサリー」

「勿論、行くに決まってるでしょ」
サリーはそう言うと、地面を通り抜けてメイプルの元へといった。
俺もサリーに続き、下へと降りた。
そして、メイプルが見付けた道を暫く進むと、大きな扉へとぶつかった。
他の道は無さそうだ。
サリーが先頭にメイプル、俺の順に扉を開けて中へと入った。
「何もない？」
「いや、そんな筈はないんだけど」
「サリー！上だ」
俺がそう叫ぶと、サリーは上を見て攻撃してくるボスをバックステップで避けた。
ボスの姿はゴリゴリマッチョのピエロだった。
てか、名前がキングゴブリンって絶対嘘だろ。
全然、ゴブリンのゴの字も無いじゃん。
「ありがとう、エイ」
「気にすんな、次が来るぞ」
今はそんな事を考えてる場合じゃないな。
このボスを倒すことに集中しないと。

そして、ボスが凄い勢いで持っていた棍棒で再びサリーに向かって攻撃してきた。
「【カバームーブ】！」
それをメイプルが防いだが、後ろへと吹っ飛ばされた。
どうやら、ノックバック攻撃の様だ。
「メイプル、大丈夫」
「フフン、ゼロダメージにどれだけ掛けようがゼロ！」
うん、全然平気の様だ。
流石はメイプルといった所だな。
んじゃ、次は此方のターンだ。
「サリー、いくぞ」
「分かってる」
俺達はボスに向かって走り出した……のは良いがメイプルが変な挙動で一緒に移動していた。
うん、今は気にしないでおこう。
「【スラッシュ】」
まずはサリーがボスの側を通り抜けるのと同時に、ボスに攻撃を当てた。
これにボスも反応し、サリーの方に向いて攻撃仕掛けようとしたが……。

「【ファイヤーボール】！」
振り向いたのと同時に、魔法をボスの顔に当ててダメージを与えつつ目眩ましに使用した。
流石はサリーだ、器用な真似が出来る。
「【ダブルスラッシュ】！」
その間にサリーはボスに近づき、追撃をした。
流石に、この攻撃でボスはサリーを完全にロックオンをしたようだ。
サリーの動きを、ずっと見ている。
ただまぁ……
「私だけを見ていて良いの？」
セリフ……取られたちゃった。ショボン
その言葉に反応したのか、足元まで近づいていた俺を見付けた様だが、もう遅い。
「【抜刀・乱舞】！」
スキル【抜刀・乱舞】は対象を無数に斬りつける抜刀スキルだ。
しかし、これだけではボスは倒せなかった。
おう、思ってたより耐久力があったな。
まぁ、これで終わりだけどな。

「【毒竜】！」
メイプルがそう叫ぶと同時に、俺はその場から離れた。
そして三本の毒竜がボスへと攻撃をし、奴はポリゴン状となり、消えていった。
「やったー」
「それでメイプル。あの動きは何なの」
「【カバームーブ】の事。あれ、便利だよね。受けるダメージが二倍になるけど、対象の人の近くに移動出来るんだよ」
「はは、移動に目的として使うのはメイプルだけだろ」
と、少し話していると宝箱と転移の魔方陣が現れた。
俺達は宝箱を開けると、中には銀のメダルが3枚も入っていた。
俺達三人はそれを1枚ずつインベントリへとしまった。
そして、転移の魔方陣に乗ると光に包まれ再び、草原へと戻ってきた。
少し違うとすれば、前まで見えなかった雪山が遠くに見える事位だろう。
「それでどうする、メイプル」
「取り敢えず、あの雪山に向かおう」
俺達はメイプルの言う通り、雪山に向かってるが流石にメイプルに合わせる訳にも行かないので、今回は背負って行く事にした。

「あー、面倒くせ～」
「なら、逃げてばかりじゃなくて少しは手伝ってよ」
俺達は今、雪山に向かっている途中の森に入ったのは良いが、猿みたいなモンスターに苦戦していた。
別に強い訳じゃない、ただ単に数が尋常なく多いのだ。
そして一番の苦戦の原因は……
「エヘヘ……すう……すう……」
うん、メイプルが俺の背中で気持ち良さそうに寝てる。
てか、こんなに激しく動いているのに、まだ起きないのかよ。
「ったく、仕方無いな」
俺は左手で腰に装備にしてある【黒刃刀・月】を抜刀し構えた。
正直、この状態だとバランスが取れにくいし、動きにくいが仕方ない。
「ひとっ走り、付き合えよ。お前ら」
俺はそう言って、モンスターの群れに向かって走り出した。
サリーの攻撃を、三回喰らって倒されてるのを見る限り、俺の攻撃だと多分一撃で倒

せるだろ。
ただ、スピード面では不安があったので、スキル【三式　疾風迅雷】を発動させた。
「よし、いっちょ上がり。おっと」
俺はバランスが崩れそうになり、すぐさま刀を鞘に戻してメイプルの太ももを持ち上げ、体勢を整えた。
それで、俺が数秒で周りにいたモンスターを7割ほど倒すと、残りのモンスターは勝てないと思ったのか逃げていった。
フムフム、ＡＩ強化の影響みたいだ。
まぁ、こっちとしては大助かりだけどな。
「ねぇ、エイ。最初からやってよ」
サリーがジト目でこっちを見てくる。
やめろ、そんな目でこっちを見るな。
ゾクゾクする……訳無いからな。
「まぁ、次からは善処するよ」
「はぁ。それにしてもメイプルも良く寝れるよね」
「全くだ」
メイプルの奴はあれだけ動いたにも関わらず、寝息を立てて眠っていた。

「取り敢えず、今日中に雪山の麓まで行きたいな」
「そうね、日も傾いてきたし」
そして、俺達は麓目指して走り出した。

結果的に二時間掛けて、目的地に到着した。
その間に何回かモンスターに襲われたが、損害もなく倒した。
それにモンスターを倒した事で、銀メダルが1枚だけドロップした。
これはサリーへと渡した。
「1日に4枚もメダルを手に入れて順調だな」
「まぁ、運が良かったかもね」
「かもな。サリーは先に休みな、その間は俺が見張りをしているから」
「そうさせて貰うね」
俺はメイプルを木に持たれかけさせ、インベントリから毛布を取り出して掛けてやった。
サリーも毛布を使って地面に横になって眠っていた。
「ふぅ～、今日は大変な1日だったな」

自由気ままに銀翼を討伐しますー前編ー

「ふぁ、寝みぃ」
「おはよう、エイ」
「おはよう、サリー。メイプルの奴は」
俺がそう聞くとサリーは指を指した。
俺はその先を見るとまだ気持ち良さそうに寝ているメイプルを姿があった。
イヤ～、流石に寝すぎだろ。
「はぁ」
俺はその場から立ち上がり、メイプルの目の前に移動した。
「おい、起きろ。この寝坊助」
俺はそう言って、メイプルにかなり強めにデコピンをした。
流石にこれにはメイプルも目を覚ました。
「あれ。私、どれだけ寝てた？」
「もう二日目の朝だ」

「えっ……えええええっ」
それからは、メイプルから何で起こしてくれなかったのとか、色々と聞いて来たが俺達二人はため息しか出て来なかった。
「私達は何回か起こしたよ。二人だと見張りがキツいからね」
「それでも起きなかったのはメイプルだからな。仕方なく二人でやったが、そのせいでこちとら寝不足だ」
「うぅ～」
それを聞いたメイプルはぐぅの音も出なくなり、少ししおらしくなってしまった。
まぁその分、今日はっかりと働いて貰うけどな。
「取り敢えず、出発するぞ。昨日の内にあの雪山の麓までは来たからな」
「う、うん。エイは怒ってる」
メイプルはこっちを上目遣いで見ていている。
うん。ヤバい、可愛すぎ。
やめてくれ、そんな目で見られたらドキドキするし、誰もが何も言えなくなるだろう。
まぁ、俺はハッキリとは言うがな。
「別に怒ってはいないさ。ただまぁ、今日は昨日の分まで働いてくれるよな」
「えっと、頑張る」

「よし。んじゃ、出発だー」
「おー」
この時、サリーはエイの笑顔に少し恐怖を覚えていた。
だって、表情は笑っているのに、目だけは笑ってないのだから。
メイプルは、特に気付いていない様だ。
流石は天然メイプル。
うん、エイだけは怒らせてはいけないと心の中で誓うサリーであった。
「サリー、早く～」
「あっ、今行く～」

それから、俺達は二時間ほど時間を掛けて、雪山の頂上へとたどり着いた。
「やっと着いた～。でも不思議、雪なのに全然冷たくない」
「まぁ、ゲームの中だしね」
メイプルの言葉にサリーは返答しながら、辺りを探索していると、彼女は転移の魔方陣を見付けた。
他に何かないかと、俺も探索を始めるかと思い行動しようとした時、背後から足音が聞こえた。

サリーもそれに気付いたのか、俺達の元に戻って来ていた。
俺とサリーの二人は何時でも攻撃を出来るように、武器に手をやっていた。
メイプルの奴は未だに雪で遊んでいた。
「おっと、先約がいたか」
登ってきたのは少数パーティーで、先頭には顔見知りの姿があった。
俺はこの時点で刀から手を離していたが、サリーの奴はまだ武器に手をやっていた。
「あ、クロムさん」
「メイプルにエイ……そっちはサリーだったか」
「ど、どうも」
「おっと、俺達は戦う意思はないよ」
そう言うとクロム達は、両手を上げた。
どうやら、本当に俺達と戦う意思は無いみたいだ。
「私も知り合いと戦うのは」
「メイプルがそう言うなら……振りかかる火の粉だったら払っている所でした」
そう言って、サリーも武器から手を離した。
「おぉ、怖い怖い。にしても残念だ。あれには1パーティーしか入れなそうだ」
クロムは転移の魔方陣を見付けた様で、そんな事を言い出した。

「あまり上手くいってない感じですか」
「まぁ、昨日は1枚も見付からなかったな」
「ねぇ、二人とも良いかな」
クロムの言った事を聞いたメイプルは、俺らに何か言いたそうだった。
俺とサリーは顔を合わせると、思ってる事は同じらしく俺はメイプルに『すきにすると良い』と言った。
それを聞いたメイプルは
「なら、クロムさん良かったらどうぞ」
そうクロムに言った。
「えっ、良いのか。こう言うのは早い者勝ちだろ」
「良いんです。私達は昨日、何枚かメダルを手に入れたので」
「そうか。なら、お言葉に甘えようか。後からメダルがザクザクでも文句は言うなよ」
「言いませんって」
そして、クロムは俺達にお礼を良い、転移の魔方陣へと入っていった。
勿論、クロム達が入り終わると魔方陣は消えていった。
「この御人好しめ」
「エへへ」

「でっ、どうするんだメイプル」
　俺がそう言うと、さっきまで閉じていた魔方陣が再び起動した。
「どうして」
「考えられるのは二つ。アイテム回収だけで速攻で終わったか……」
「強力なボスに手も足もでずに呆気なく倒されたか、だな」
　多分、これは後者だろうな。
　アイテム回収で終わるなら、わざわざ魔方陣を再び起動させないだろう。
　それにトッププレイヤーであるクロムがいるパーティーにも関わらず、いとも簡単に倒されたとなると、これはかなりの強敵だろう。
「よし、行ってみよう」
「分かった、何があるか分からないから【悪食】を使えるようにしてて。エイもそれで良いよね」
「問題ないぞ」
　そして、メイプルがいつもの黒い大盾に装備を変えたのを確認してから、俺達は転移の魔方陣へと乗った。

俺達が転移された場所は馬鹿みたいに広く、地面には雪が積もっており、いたる所に氷の塊がある事を確認できた。
どう見てもボス部屋だ。
「何があるか分からんから、気を抜くなよ」
「うん」
「分かってる」
そして、俺達は周りを警戒しながら部屋の真ん中辺りに来たとき、突然モンスターらしき奇声と上にあった氷の塊が降ってきた。
それをバックステップで回避し、上空を見ると銀色の翼をした怪鳥が飛んでいた。
「あれがボス見たいね」
「取り敢えず、牽制してみるか。【抜刀・鎌鼬】」
俺は怪鳥に向かって攻撃をしたが、簡単に避けられてしまった。
そのせいか、怪鳥は再び奇声を上げ、自分の周りに氷の塊を大量に生成しこっちに向かって放ってきた。
「【カバー】」
メイプルが俺達の前に出て、両手を広げて奴の攻撃を受け止めた。
「大丈夫、メイプル」

「うん、ここで【悪食】を使いきる訳にはいかないから」
すると、怪鳥はメイプルに攻撃が効かないと分かると、一つの大きな氷の塊を生成してこっちに放ってきた。
メイプルはそれを大盾を使い、攻撃を防いだのと同時に俺達二人が両サイドから飛び出した。
「【ウィンドカッター】！」
この攻撃で怪鳥はサリーの方を標的とし、今度は大量の小さな氷と大きな氷を同時に、サリーに向けて放たれた。
サリーは小さな氷を全て避け、大きな氷を足場にして徐々に怪鳥へと近付いていった。
それは怪鳥自身も良くないのか、更に数を増やしてサリーを撃ち落とそうとした。
だが、そうはさせない。
「【五式　剣山刀樹】」
俺は5本の刀を呼び出し、ソードビットみたいに小さな氷を次々と落としていった。
「こいつはおまけだ【抜刀・鎌鼬】」
今度は見事に当たり、怪鳥のヘイトが俺の方へと向いた。
その隙を逃さず、サリーが追い撃ちを掛けた。

「【スラッシュ】【ファイヤーボール】【ダブルスラッシュ】」
それは見事に決まり、怪鳥は奇声を上げた。
流石にこれには怒ったのか、まだ空中にいるサリーへとその巨体で突撃していった。
「させないよ【毒竜】！」
それは、メイプルのスキルによって防がれ、不発に終わった上、代わりにダメージを負わせた。
ただまぁ、【毒竜】は凍らされ少しのダメージにしかならなかった。
「でも、あれだけやってＨＰが１割も減ってないとか耐久力ありすぎだろ」
「そうだね、っと次来るよ」
怪鳥は初動と同じ様に俺達に向けて攻撃をしてきた。
こちらも同じ様にメイプルが俺達二人の前に立ち、盾となった。
しかし、今度はメイプルに当たるとダメージエフェクトが出た。
「貫通スキルッ【瞑想】」
「【ヒール】」
メイプルとサリーは即座に回復スキルを使い、攻撃をしのいでいる。
俺も５本の刀で、なるべくメイプルに当たらない様に、攻撃を防いでいだ。
そして、攻撃が収まるとメイプルが再び【毒竜】を使い、怪鳥へと攻撃をしたが、攻

撃は当たるも直ぐに氷付けにされ、ほとんどダメージが入らなかった。
ただ、ほんの一瞬だけ隙を作る事は出来た。
「はぁぁ、【ダブルスラッシュ】【パワーアタック】【ウィンドカッター】」
「【二式　怪力乱神】【抜刀・乱舞】」
俺とサリーは同時に【超加速】を発動して一瞬で近付き、二人の連撃を喰らわした。
しかし、怪鳥も唯では終わらないと言わんばかりに、サリーに突撃をしてきた。
「【カバームーブ】」
それもメイプルのおかげで不発に終わり、逆に怪鳥がダメージを受けるはめとなった。
「もう一回！」
そう言ったメイプルは怪鳥に闇夜ノ写を当て、【悪食】を発動させた。
流石に一度にこれだけのダメージを喰らった怪鳥は、地面へと落ちた。
「今！」
サリーは地面に降りた瞬間、怪鳥へと近付いて追撃をしようとした。
が、怪鳥はサリーへと顔を向けた時、そこにはエネルギーが溜められ、サリーに向けて放たれた。
「サリー！」

「あちゃ～、少し焦ったかな」

サリーがそう言うと怪鳥のエネルギー砲に飲み込まれ、爆風で辺りの雪が舞い上がるのだった。

自由気ままに銀翼を討伐しますー後編ー

舞い上がった雪が少し明け、目の前には怪鳥の姿しかおらずサリーの姿はどこにも見えなかった。
メイプルはどこかでサリーなら大丈夫と思っていた様だが、現実はそうはいかなかった。
「嘘だよね、サリー」
そう呟いていたメイプルの目には、大きな涙の粒があった。
「あっぶね～、俺まで巻き添えになる所だった」
「も、もう良いから降ろしてよ」
だが、先程も言った通り現実はそう甘くはない。
怪鳥の攻撃でサリーがやられる事さえも……。
雪が完全に晴れ、メイプルは声のした方を見るとそこにはサリーをお姫様抱っこをしている妖狐化しているエイの姿があった。
ただ、サリーの顔が少し赤くなっていたが、今のメイプルはそこまでは見ていなかっ

た。
「サリー！」
俺がサリーを地面に降ろすのと同時に、メイプルがサリーに抱き着いてきた。
この状況、微笑ましいなぁ……っとそんな場合じゃなかったな。
「取り敢えず、あの怪鳥を倒すぞ」
「うん！」
「そうだね」
俺はその言葉を聞くのと同時に怪鳥の方へと近付いていく。
少し前まで地面にいた奴だったが、今は空中へと戻っていた。
奴の体力は残り7割だ。
そして、怪鳥は俺が近付いているのに気がつくと、大小と大きさの違う氷を大量に生成し俺に向かって放ってきた。
今までの攻撃と同じだと思っていたが、一部防御力貫通のものも混ざっていた。
まぁ、俺には関係ないけどな。
それに……
「芸の無いやつだな」
俺はその全てを避け、少しずつ怪鳥へと近付いていた。

ただ、奴もそう簡単には行かせてくれない様で、大量の氷に貫通能力以外の物を混ぜていたらしい。
避けた筈の氷が後ろから向かってきたのだ。
「ちい、追尾型か」
俺はこのままだと避けれないと理解し、刀を抜刀して向かってくる氷を砕いた。
怪鳥はこの一瞬の隙を逃す事なく、サリーに向けて放ったエネルギー砲を俺に向けて放ってきた。
それをバックステップでかわし、追撃をしてくる氷を刀で防いだ。
「もう一つギアを上げるか【三式　疾風迅雷】」
それと俺はもう一つの刀【黒刃刀・月】を抜き、奴の目の前まで一瞬で移動した。
急な加速には怪鳥もついて行けなかったらしく、驚いた様に目を見開いていた。
「喰らいな」
俺は【跳躍】と【空中歩行】を最大限に活かし、怪鳥に二刀で無数に斬りつけた。
例えるなら、進撃○巨人のリヴァイ兵長みたいな感じかな。
そして【空中歩行】の効果が切れると、俺は地面へと落下した。
怪鳥の体力は残り半分となっていた。
やっぱり通常攻撃だとこんなもんか。

これだったら何かしら抜刀スキル以外の攻撃手段を増やしておくべきだったな。

ピロリン♪

「何かスキルを覚えたみたいだな」

まぁ、それは良いのだが……

怪鳥は今までで一番大きな奇声を上げ、俺に向かって突撃をしてきた。

「しまったな、これなら一回分残しておくべきだったな」

まぁ、【空蝉】があるから大丈夫だと思うがここで使わされるとはな。

と、諦めモードの俺だったが、いつの間にか怪鳥の背中へとサリーが乗っていた。

「【大海】」

「【毒竜】」

サリーのスキルで怪鳥の動きは鈍くなり、それにメイプルの【毒竜】が毒を吐き、完全に怪鳥の動きが止まった。

「悪いな、二人とも助かった」

「これぐらいは当然」

「これでさっきの借りは返したよ」

さっきの攻撃で怪鳥の体力は1割も減っていた。

一度目とは違い、毒を諸に喰らったのがダメージの伸びた理由だろう。

と、新しく覚えたスキルをパッと確認しておこう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【二刀の心得】

二刀を抜刀している時のみ、ＳＴＲ　ＡＧＩ＋１％

取得条件：二刀抜刀時に攻撃を１０回当てる

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【天乃四霊】

二刀流スキルの複合スキル

取得条件：二刀抜刀時に攻撃を３０回当てる

【二刀一輪・青龍】

【二刀一輪・白虎】

【二刀一輪・朱雀】

【二刀一輪・玄武】

【二刀一輪・麒麟】

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

おっ、丁度良いスキルが手に入ったな。

これで二刀抜刀時でも攻撃スキルが使える様になった。
「エイ、奴が来るよ」
サリーの言葉でステータス画面を閉じ、怪鳥の方へと目を向けた。
すると、奴は今までとは違う奇声を上げた。
それが終わるとだんだんと怪鳥の体が黒い影が被い始めた。
俺はこれは不味いと思い、刀を一度鞘に納めてスキル【抜刀・鎌鼬】を使った。
サリーも同じ事を思ったのか魔法で攻撃をしていた。
だが、二人の攻撃は一切効かなかった。
「中断不可かよ」
俺がそう呟いた瞬間、影は怪鳥の全体を被い終わり、再び奇声を上げた。
そして、巨大な氷を5本生成し俺らに向けて放ってきた。
ただ、それだけでは終わらずに自身も突撃をしてきた。
「来るぞ」
「【カバー】！」
流石にメイプルでもほぼ同時に来る二つの攻撃を大盾無しでは防ぐ事はできず、【悪食】を使って攻撃をガードした。
「わぁッ」

しかし、怪鳥の突撃は【悪食】を喰らってもなお、勢いが衰えずメイプルの防具ごと貫かれ、吹っ飛ばされた。
でも、流石はメイプル。
何とか耐える事ができ、防具も即座に再生していた。
ただ、怪鳥は特に変化もなく、さっきよりも早いスピードで突撃をしてきた。
このままだと俺はともかく、サリーがやられてしまうと思い、俺はサリーの目の前へと立ち、刀をクロスにして攻撃を受け止めようとした。
「【カバームーブ】【カバー】！」
すると、メイプルがスキル使い俺の前へと現れ、代わりに攻撃を受け止めた。
メイプルはさっきと同じ様に吹っ飛んで行ったが、今度は怪鳥も地面へと倒れていた。
「メイプル！」
「二人とも行って」
その言葉を聞いた瞬間、サリーが先に空中へと飛び出した。
怪鳥はさっき程の影響か、黒い影が無くなっていた。
しかし、まだ余力が残っているらしく、空中にいるサリーに向けて無数の小さな氷を放った。

それは見事にサリーに当たったが、サリーの体が霧状になり消えていった。
これには怪鳥も驚いた様で周りを見渡していた。
「私の取って置き【蜃気楼】はどうだった」
その言葉に反応した怪鳥は声のした方へと目をやった。
そこにはメイプルに肩を貸しているサリーの姿があった。
「【毒竜】」
それと同時にメイプルがスキルを発動させ、怪鳥へと攻撃をした。
それを諸に喰らった怪鳥は奇声を上げ、苦しんでいるようだったが、流石に倒れはしなかった。
ただまぁ……
「これで終わりだ【零式　門戸開放】【二刀一輪・白虎】！」
＝＝＝

スター〇ースト・ス〇リームのようなものだ。
しかし、怪鳥の体力がミリで残ってしまった。
怪鳥は攻撃が止んだ隙に反撃をしようとしたが、もう遅いんだな。
俺が刀を鞘に納めた瞬間、５本の刀が怪鳥の体に突き刺さった。
これで、怪鳥もポリゴン状に分解され消えていった。
「ふう、やっと終わった～」
そう言って、二人は背中合わせにその場へと座った。
「お疲れさん」
俺はそう言いながら、二人の元へと近付いた。
「エイが二刀使ってるの初めて見たかも」
「あっ、私も～」
「まぁ、使う機会が無かったからな。おかげでこの戦闘中で新しいスキルを覚えたけどな」
正直、あそこで新スキルを覚えていなかったら、もう少し苦戦してただろうが、それはもしもの話なので考えるのは止めた。
「にしても、最後の攻撃でメイプルがやられたと思ったよ」
「あの時新しいスキルを覚えたみたい。えっと、【不屈の守護者】１日一回、どんな攻撃

もＨＰが１で耐えれるスキルだって」
「そのスキルが無かったらやられてたのか……って体力が１ッ。【ヒール】×３」
とまぁ、何とかあの怪鳥を倒した俺達は、暫くした後にこの部屋を探索した。

～少女等探索中～
まぁ～、あながち間違ってはないけどさ～

何か最近、テロップにメンタル攻撃をされてる気がするが、気のせいだよな??
「ねぇ、本当に良かったの。エイ」
「ん？別に構わないさ。代わりにメダルを多く貰ったしな」
「まぁ、エイもこう言ってるし、気にしなくても良いんじゃない」
俺達がここで見付けたのは、二つの卵と５枚のメダルだった。
全て同じ場所にあったのを見ると、これがあのボスの討伐報酬って所だろう。
それで俺は二人に卵を渡す代わりにメダルを計三枚貰う事にしたのだ。
「う～ん、そうだね」
「それで転移の魔方陣が３つあるけどどうする」
「なるべく戦闘が少ない所が良いな」

「私も」
「それは俺も同感だ」
取り敢えず、俺達はテキトウに魔方陣へと入り、この場を後にした。
そして、転移した先は森の中だった。
「外はもう夜だったか」
俺は空を見上げると、真っ暗で星と月が綺麗に見えていた。
まぁ、星の配置やらは現実とは全く違う上、このフィールドの月は３つあり、それぞれ緋・蒼・翠の三色であった。
これは現実では中々見れないな。
そう思っていると、隣からヒィっと怯える声が聞こえた。
声のした方を見ると、メイプルにしがみついているサリーの姿がいた。
そう言えば、気にしてはいなかったが、周りには幽霊や火の玉なんかが浮いている。
「メイプル、サリーの奴どうしたんだ」
「そっか、エイは知らないんだよね。えっと、サリーは幽霊とかが苦手なんだぁ～」
「なるほどね」
「ねぇ、話してないで早くこの森から抜けよう」
その光景は、今までのサリーとは思えないくらい、弱々しかった。

これが俗に言うギャップ萌えって奴だなｗ
まぁ、こんな状況でモンスターと出会すと面倒だし、正直戦いたくはないので、さっさと抜ける事にしよう。
俺はそう思い、【跳躍】と【空中歩行】を使って上空から、この辺りの地形を見渡した。
うん、案の定かなり先まで森ばっか。
「おっ、あれは……」
俺は地上へと戻ると、二人にこの辺りの地形を教えた。
「暫くはこの森から抜けれないね」
「最悪だ～」
「あ～、少し進んだ所に小屋があったけど、そこで休むか」
俺がそう言うと、サリーはうんうんと激しく首を縦に振っていた。
そして、俺達はその小屋へと向かうため森の中を進んだ。
その間、サリーは『ヒィィィ』や『アワワワ』などリアクションが豊富であった。
こんなサリーをもう少し見ていたい自分がいたり～いなかったり～。
皆はどう思った？
俺は見ていたいと思ったがなｗｗ
とまぁ～、数分程度で小屋へと着いた俺達は中に何も無い事を確認して中へと入っ

た。
「あいつらはこの中には入って来れないみたいだな」
「なら、朝になるまでここで過ごそう。サリーもこの状況じゃ探索所じゃないし」
「そうだな」
こうして、俺達はこの小屋で寝る準備をして、一晩を明かす事にした。
??????????????????
にしても、サリーが幽霊が怖いと言う弱点があったとはな。
「うぎゃぁ！銀翼がやられたー」
「銀翼ー？あいつはプレイヤーが倒せる設定じゃないだろ？」
「殺傷能力の高いスキルを詰め込んだ俺達の悪意の塊だ」
「誰だ？誰にやられた？」
「これだ！」
「メイプル？マジか!?おいおい流石に銀翼は無理なはずだろ」
「機動力が足りないはずだー。ありえないー」
「わぁ！卵。幻獣の卵が持っていかれるのか」

「中身は？」
「きつねと亀。まぁまだマシなほうだが……」
「鳥と狼じゃなくて良かった」
「あぁ、ありえねー。メイプルに取られるなんてー」
「手のあいてるやつはメダルで取れるスキルにチェックを入れ直せ！変な使い方できるようなスキルがないか再確認だ！」
「了解！」
「仕事がまた増えるなー」

自由気ままに二人とは別行動のようです

「んッ、もう朝か」
俺は窓から入ってきた太陽の光で目を覚ました。
メイプルとサリーの二人は可愛い寝息をたてて、まだ寝ていた。
無理も無いだろう、昨日の戦闘で肉体的にも精神的にも疲れているのだろう。
精神的には特にサリーは……。
「やっぱり日が昇ってると幽霊系は見当たらないな～」
やっぱりと言うか、夜になると現れる仕様なのだろう。
こういった所はかなりの確率で、何かしらイベントがあったとは思うが、サリーがあの状態だと無理だよな。
まぁ、日が出てる内は大丈夫だと思うので、軽く探索しながら早めに森を抜けるとするか。
「ふにゅ～。おはよ～エイ～」
「あぁ、おはようメイプル。起こしちまったか」

「大丈夫だよ～」
まだ寝惚けているのか、メイプルの言葉には、いつも見たいな元気は無かった。
「そうか。なら、サリーをさっさと起こしてこの森を抜けようぜ。今なら、幽霊系は居ないからな」
「わかった～」
そう言うとメイプルはサリーを起こした。
サリーはまだオドオドとしていたが、俺が外の状況を伝えると物凄い剣幕で『今すぐ抜けよう！そうしよう！』と言ってきた。
まぁ、元々この森からは早めに出ようと思っていたが、あそこまで必死なサリーは初めて見た。

～少女等、移動中～
うん、もうつっこまねぇーわ

それから、なんやかんや三時間ほど掛けて、森を抜けたのは良いが、その先が砂漠って世界観可笑しいだろ、おい。
まぁ、これもゲームだからと言ってしまったら終わりだけどな。ハハハッ

あと、森を抜ける際メダルを1枚見付けたので、これはメイプルに渡した。
今の所メダルは、
メイプル：金のメダル1枚、銀のメダル3枚
サリー：銀のメダル3枚
エイ：金のメダル1枚、銀のメダル4枚
ってな感じだ。
「進めど進めど、砂ばっかたな」
「まぁ、砂漠だからね。それに今までの傾向でいくとこの砂漠もかなり広いと思うよ」
歩くのは苦ではないし、本物の砂漠見たいにほとんど暑さを感じない。
ただ、暑さを感じないと言っても、何も感じない訳じゃない。
ポカポカ日が暖かく、風が心地良い。
正直、これほどないと言った優れた環境だ。
「ねぇ、二人とも見てオアシスだよ」
「本当だな」
「蜃気楼じゃなきゃ良いけど」
そんなことを言いつつも、俺達はそのオアシスへと向かった。
にしても、流石にでかすぎじゃないですか。

何で地底湖並みの大きさなんだよ！

「流石に広すぎるから、俺はこっちから探索するから二人は反対側から探索していってくれ」

「了解～」

「分かった」

二人は二つの返事で了承し、俺達は二手に別れて探索する事にした。

けど、この選択が後に裏目になるとは、その時のエイは思ってもしなかった。

……ん？何故かフラグがたった気がするが気のせい……だよな？

～探索中～

暫く歩いていると、二人がいた方向で俺達が来た方へと砂煙が拡がっていった。

少し遅れてもう一度、同じ方向に砂煙が拡がっていくのが確認できた。

「なんだぁ、アレ」

俺は暫くその砂煙を眺めていたが、探索中だったことを思い出し、気にせず歩き出した。

大体、このオアシスの半分位まで来たが、二人の姿は見えなかった。
「まぁ、メイプルが居るしな。もう少し進んでたら合流するだろ」
俺は再び足を進め、二人と合流を目指した。
……のは良いが、全く二人の姿を見える所か初めの位置に戻って来た。
「一周回ってきたじゃねぇか。てか、二人ともどこ行ったよ！」
そう叫んでいるとサリーからメッセージが来ている事に気付いた。
それを開け内容を読むと、俺は頭を抱えた。

『ごめんね、色々とあってダンジョンをクリアしないといけなくなった。どれ位掛かるか分からないから一人で頑張って』

「ダンジョンってどうしてそうなったんだよ。てか、ここから俺一人かよ」
俺はハァとため息を着いた。
よし、だったら俺だって好き勝手してやる。
すると、俺達が来た方角から少し離れた所に数人の人影を発見した。
「丁度良い、少し暴れたい気分だったんだ」
そう呟いた俺は、スキル【三式　疾風迅雷】を発動させ、人影が見えた場所に向かっ

た。
しっかりと確認できる程近づくと、お相手さんも気付いた様で武器を構えた。
数はパーティー最大の８人。
タンクが２人、アタッカーが３人、メイジが２人のヒーラーが１人。
普通にバランスの良いパーティーだった。
「だが、相手が悪かったな【抜刀・雷光】」
俺はそのまま、スピードを落とさずにタンクの一人に攻撃をし、ポリゴン状になり消えた。
「お前ら、ひとっ走り付き合えよ」
彼らは、俺の声が後ろから聞こえた事に気付くとパーティー全員、直ぐに振り向いた。
反応は良いが……
「隊列がそのままで良いのか」
俺は一瞬で後衛の二人の元に近づき、メイジとヒーラーを一人ずつ倒した。
「あぁ、もしかして『妖狐の美少女』」
パーティー内の一人がそう言うと、皆が完全に動きを止めた。
ただ、俺はそこ言葉にイラッときた。
「おい、俺は男だ」

そう言って俺は残りのパーティーメンバーを倒し、全滅させた。
メダルは……無いか。

そして今日一日は、ＰＫをメインに探索をしていて分かった事があった。
何故か俺は『妖狐女』『妖狐の美少女』『女妖怪』等と呼ばれているらしい。
うん、別に妖怪や妖狐と呼ばれるのは良い、事実だしな。
だが……
「何で女って言われてんだよッ。俺は男だと言ってるだろッ」
俺がそう叫ぶと辺りにいた鳥達が飛んで行ってしまった。
てか、『俺が男だ』と言っても誰も信じてくれないんですけど、どうなってんの。
信じてくれたの、第一回イベントで会ったドラグさんだけだよ。シクシク
「はぁ、絶対初めに女って言った奴、見つけ次第一発ぶん殴る」
あっ、今日のＰＫで手に入ったメダルは3枚でした。パチパチ
うん、思ったより少ないね。
意外とメダルを見つけるの難しいのかなぁ。
「取り敢えず、今日の所はここで寝るとするか」

俺は今、洞窟の中で夜を過ごす事にしていた。
えっ、そんな所で寝てて大丈夫かって。
安心しろ入り口には罠を仕掛けておいたから、誰かが入って来たらすぐに分かる様になってる。
「んじゃ、お休み～」

朝……。
グーデンモルゲン。俺、影宮　万里ことエイです。
イベント4日目ですね～。
ただ今絶賛、大量のモンスターに襲われて大変な目にあっています。
何故かって？
洞窟から出て暫く探索をしていたら、以前メイプルがダンジョンに落ちたように俺も落ちました。
メイプルの時と違って俺が落ちたのは、モンスターの巣窟みたいです。
「ってか、お前らいい加減にしろやぁ。ゆっくり説明出来ないだろッ」
はぁはぁ、いっちょ上がり～。

えっと、何をしようとしてたんだっけ。
そうそう、俺が落ちたのもダンジョンみたいでいくつも奥に続く道があった。
メイプルの時と違って時間が掛かりそうだ。
「まぁ、こう言う場所に良くお宝が眠ってるもんだしな。さっさとクリアしますか～」
そして、奥に続く道へと足を進めた。

～少女探索中～

三時間ほど、このダンジョンを歩き回っていたが、特に目新しいモンスターやギミックはない上、ボス部屋すら発見出来なかった。
ただただ、馬鹿みたいに広かったこと以外は……。
しかし最下層には、いかにも怪しい転移の魔方陣は見つけた。
えっ、時間を跳躍しすぎだって。
察してくれ……唯々、モンスターを倒して続けて進んできたシーンの何処が面白いんだ。
そう、全く面白くない。
だから、カットしました。

別に良いよね!?答えは聞いてない。
「何か、いや～な予感はするが行ってみるか」
俺は転移の魔方陣に入り、ある場所へと移動した。
その場所とは森であった。
しかし、唯の森ではなく周りがドーム状に囲まれており、更に馬鹿みたいに広い。
この時点であの時と条件があまりにも似ていた。
そう、あの馬鹿みたいに強かった怪鳥の時と……。
「ガルルッ」
その呻き声が聴こえると同時に、木々の奥から巨大な狼が姿を現した。
「流石にこれはマズイかもな」
そう言いつつ、俺は刀を握り臨戦態勢をとった。

自由気ままにフェンリル討伐です

「くっそ、無駄にすばっしこいな」

巨大な狼……フェンリルって言った方が近いだろうか。

と戦い始めて数十分が過ぎようといていたが、お互いに攻撃が当たらず、均衡状態が続いていた。

ただ、俺はスキル【三式　疾風迅雷】を使って何とか奴のスピードについていける状態で、ＳＴＲ　も俺以上にある。

なので、あちらこちらに大きなクレーターが出来ていた。

攻撃を当てて無いので分からないが、ＨＰもあの怪鳥並みにあると考えている。

「このままだとジリ貧だな」

あっ、挨拶が遅れたスッね。

影宮　万里ことエイすッ。

自由気ままにプレイをモットーに、今現在　鬼畜モンスターとの戦闘中スッ。

「あ～、仕方ないけど使うか【妖怪変化・妖狐】」

正直、この後に何が起こるか分からない序盤で使いたくはなかったが仕方ない。
まぁ、【剣ノ舞】と【疾風ノ舞】の上昇値が最大までいったし問題無い……はずだ。
「さぁ、ショータイムだ」
俺は一瞬でフェンリルの元へと移動し、スキル【抜刀・乱舞】で攻撃を仕掛けた。
流石に急に加速した俺の動きにはついてこれなかった様で諸に攻撃が入った。
「おっ、これで2割も削れたか……おいおいおい、マジかよ」
体力の削れ方から、ＶＩＴは怪鳥の半分位しか無さそうなので問題は無さそうだが、その代わりに奴は自己回復スキルを持っている様だ。
今もみるみると体力が回復しており、さっき与えたダメージも数十秒で回復していく勢いだ。
それだけで終われば良かったが、そうは問屋が降ろさないらしい。
フェンリルはウォォォッ、と大きな雄叫びを上げると、奴からかなり薄い翠のエフェクトが表れた。
そして、動き出したフェンリルは俺の眼では追えない程のスピードを出した。
「ちぃッ」
俺は持ち前の直感で奴の初激は何とか防いだ。
だが、このままだとマズイと思い、新たにスキルを発動させた。

「【月華】オン！」
そうすると、さっきまで捉えることが出来なかったフェンリルを確認する事が出来た。
ただ、スピードはまだ向こうの方が速いみたいだ。
俺は二刀を抜刀した……スキルと共に。
「【二刀一輪・玄武】」

＝＝＝

俺はスキルで目の前まで移動し、フェンリルへと攻撃をした。
これはＡＧＩ関係無く一瞬で移動するから、結構便利なスキルだ。
まぁ、使う機会は少なかったけどなッ。
（正直、大抵のモンスターには普通に攻撃した方が速いしな……。）
それより、これで【二刀一輪・玄武】の効果がのった【影牙一閃】はＨＰの３割を削った。
フェンリルも驚いたのか一度、距離を空けようしたが、俺はそれを許さなかった。
「逃がさないぜ【二刀一輪・白虎】！」
それは見事にクリーンヒットし、奴の体力をみるみると削り、体力は残り３割を切った。
ここまできたのなら、一気に畳み掛ける事にした。
「これで最後だ【絆の共振】！」
スキルの発動と共に周囲の木々もろともフェンリルを呑み込み、砂煙が舞った。
そして砂煙が晴れると、そこには倒したと思っていたフェンリルがＨＰ１を残して立っている姿があった。
「くそッ【不屈の守護者】か」
てか、ボスが根性持ちってアリかよッ。

いや、普通のボスなら良いんだ。
ただ、この化け物並みのボスに持たせるのは、おかしくないか。
絶対、ロクな事が起きないだろ。
その予感は当たり、フェンリルが今までに一番大きな雄叫びを上げると、奴の周りに見えていたエフェクトは濃い翠になっていた。
それと奴からかなり強い強風が発生している上、体力が全快していた。
「マジかよ……」
俺は直感でマズイと感じ、攻撃に対応できる様に、すぐさま刀を構えたが……。
「ガハッ」
気付いた時には俺は数十メートル、吹っ飛ばされて地面に強打しながら転がっていった。
この時、【空蝉】のおかげでやられる事はなかったが、次に同じ攻撃を喰らうと確実にやられてしまう。
俺は体勢を立て直し、スキルを発動した。
「【心操】！」
このスキルは5秒先の未来が見えるスキルだ。
一度、目を離してしまった奴の攻撃を今の状態では防ぐ事は難しいが、このスキルそ

んなのは関係なしだ。
「正面か！【跳躍】【空中歩行】！」
俺は攻撃がどこから来るかを見た上で、空中へと回避していった。
取り敢えず、少しは考える時間も稼げると思った上での行動だ。
しかし、そう都合の良い様には、させてくれないみたいだ。
「ははっ、お前も空中を移動する手段があるのかよ」
こりゃ、作戦とか考える暇がねぇわ。
こうなったら、最後の切り札を切るしか他に方法はないようだ。
ふぅ～と一度大きく息を吐き、スキルの名を口にした。
「【零式　門戸開放】【妖術・門戸開放】」
俺は万が一の為に、このイベントが始まる前に【妖術・門戸開放】を使えるように熟練度をあげていた。
【妖術・門戸開放】を使用すると同時に、俺自身からドス黒いオーラが周りに放たれ、再び俺の中へと戻っていった。
そして、今まで黒色だった髪が赤褐色に変化して、狐のお面には濃い紫の炎が纏っていた。
「さぁ、フィナーレといこうぜ」

俺は五本の刀をフェンリルに向けて放った。
奴はそれを難なく避け、こちらへと向かってきた。
俺は距離を詰められない様に地上へと向かいつつ、奴の死角から避けられた五本の刀を向かわせた。
しかし、それでも奴には当たる所か全て避けられてしまった。
「おいおい、後ろに目でもついてんのか」
まぁ、その隙に地上まで降りてこられた。
そして、少し後にフェンリルも地面へと降り、こちらを睨んでいた。
暫くの間、お互いに睨み合っていると、痺れを切らしたのか先に動いてきた。
「【二刀一輪・玄武】」
俺はスキルを使い、フェンリルからの攻撃を防ぎつつ反撃をした。
何とか、奴の攻撃に対応する事が出来ているが、お互いの攻撃は当たらない上、こっちの攻撃は当たったてもすぐに回復されている。
あとは、あの暴風が地味に厄介だ。
勢いの無い攻撃はすぐに弾かれ、逆にこっちは体制を崩してしまい、反撃をされてしまう。
「まぁ、出し惜しみをしてる場合じゃないよな【妖術・一ツ尾狐】フルバースト」

そう言うと、俺の周りに一ツ尾狐が9匹全てが現れた。
そして、一ツ尾狐達と五本の刀でフェンリルへと攻撃を開始した。
コイツらは特にスキルは使えないが、相手を誘導させる時や意識外すのに使いやすい。
そのおかげでスキル【潜影】を使い、フェンリルの後ろへと簡単に移動する事が出来た。
「貫ったー【妖術・貫通】【二刀一輪・白虎】」
俺は影から出てすぐに攻撃を仕掛けた。
多分、これが最後の隙をついた攻撃となるだろう。
しかし、フェンリルはこれを読んでいたのか、その場で回転し一ツ尾狐や刀、後ろいた俺もろとも全方位攻撃をした。
一ツ尾狐達は攻撃を受けた事で消え去り、刀は周囲に弾かれてしまった。
俺はそれを避ける事が出来ず、お腹辺りを爪で切り裂かれてしまいダメージを負った。
そして、ポリゴン状となって消える……のでは無く、俺の姿をしたものが霞となって、その場から消えていった。
本物の俺はフェンリルの懐へと潜っていた。

実際はあの時、攻撃スキルでは無く【妖術・幻影】を使っていたのだ。
銀翼戦でサリーが【蜃気楼】を使って同じような事をしていたのを見ていて正解だった。
「悪いな、それは幻覚だ【二刀一輪・朱雀】」
フェンリルは何が起こったのか理解出来なかったのか、微動たにしず俺の攻撃を諸に喰らった。
＝＝
【二刀一輪・朱雀】
二刀の刀で相手を空中に斬り上げ、瞬時に飛んでいった逆方向から叩き斬るスキル
＝＝
要は、ドラゴ○ボールとかで良く見る、殴り飛ばした場所に先回りして、また殴り飛ばすみたいな感じだ。
そして、フェンリルを叩き斬って地面に落ちている間にスキルを発動させた。
「これで最後だ【絆の共振】！」
巨大なエネルギー砲がフェンリルを呑み込み、地面へと衝突した瞬間、爆風と砂煙が起きて視界が悪くなった。
暫くすると砂煙が晴れ、地面にはフェンリルが倒れていた。

そして、ポリゴン状となって消えていった。
「終わった～。まじで死ぬかと思った」
俺は地面へと降り立つと、その場で大の字に倒れ込んだ。
すると、俺の姿が元に戻り、散らばった五本の刀も姿を消した。
「タイムオーバーか。暫くは半分位スキルが使えないな」
俺は少し休憩してから、このボス部屋をくまなく探索した。
案の定、森の奥の方に戦利品があった。
見付けたのは、メイプルとサリーの二人に譲ったモンスターの卵に銀のメダルが2枚、そして狼王の欠片。
これは説明欄を見ても『装飾品の素材』としか書かれてない為、イベントが終わったらイズさんに聞いて見ることにした。
「これで銀のメダルが9枚であと1枚だな。よし、ここから出るとするか～」
俺は戦利品を入手した事で、現れた3つの転移の魔方陣の真ん中へと入り、元の場所へと戻っては……これなかった。
うん、ここは鉱山の頂上だね。
しかも、もう夜だし。
「取り敢えず、寝床でも探すとするかな」

そう呟いた俺は、手頃な寝床を探しながら、この鉱山を下りるのだった。

??????????????????

「おい！銀狼が倒された」

「はぁ？殺傷力の高いスキルを組み込んでいない代わりにステータスが馬鹿みたいに高くした害悪モンスターが」

「誰に倒された」

「エイです」

「はぁ、またエイか。でもあの二人が見当たらないな」

「記録を見る限りソロで倒したみたい」

「おいおい、それは無いだろ～」

「てか、卵が持ってかれるぞ」

「確かモンスターと同じ狼だったな」

「まだ鳥じゃなくて良かったんじゃないか」

「いや、相性的には狼の方がヤバい」

「は～、これはメイプルとは違った化け物だな」

「メイプルが要塞だとしたら、エイは戦闘機だな」

「てか、俺達が創るボスよりボスっぽくね」
「同感」
「そう言えば、今後に実装させる予定のアイテムってここに置いてたか」
「「あっ！……」」
「はぁ、持ってかれたか～」

自由気ままにイベントが終了しました

イベント開始からゲーム内で6日目の朝を迎えた。
えっ、1日とんだって？
何言ってんだ、ここでは面白くないシーンはカットーッするに決まってるだろ。
今までそうだったし……。
あっ、でも強いて言うならあの卵を孵化させた事ぐらいかな。
産まれたのは、あの時戦ったフェンリルを小さくした者だった。
名前はゼロ、由来は……まぁ、適当だ。
そしてレベル5で、スキルは【覚醒】【休眠】【ひき裂く】【風刃】を覚えた。
まぁ、前者二つは説明しなくもと、みんな知ってるだろ……多分。
【ひき裂く】は名の通り、対象をひっかく攻撃で【風刃】は風の刃を放つスキルでＭＰを１０消費する。
ステータスはこんな感じだ。
ゼロ　Ｌｖ５
ＨＰ　１００／１００

MP　150／150
【STR　80】
【VIT　20】
【AGI　100】
【DEX　30】
【INT　30】

「そういや～、少しレベル上がったからポイントを振り分けておくか」

エイ
Lv50
HP　40／40
MP　40／10〈＋30〉
【STR　115〈＋40〉】
【VIT　0】
【AGI　115〈＋100〉】
【DEX　0】
【INT　0】

装備

頭　【深淵の髪飾り】

体　【深淵和装・桜】

右手　【黒刃刀・影】

左手　【黒刃刀・月】

足　【深淵和装・桜】

靴　【深淵の草履】

装飾品　【絆の架け橋】

【空欄】

【空欄】

スキル

【抜刀術Ⅹ】【天乃四霊】【刀の心得Ⅹ】【刀の極意Ⅶ】【抜刀の心得Ⅹ】【抜刀の極意Ⅶ】【二刀の心得Ⅲ】【二刀流】【双龍の刃】【一撃必殺】【電光石火】【剣ノ舞】【疾風ノ舞】【居合の心髄】【暴虐者】【殺戮者】【暗殺者】【暗殺】【超加速】【空蝉】【心操】【空中歩行Ⅹ】【跳躍Ⅹ】【隠密Ⅹ】【気配遮断Ⅹ】【壁走りⅩ】【猫の眼】【潜水Ⅰ】【水泳Ⅰ】【アンデッドキラー】【??????????????】

これで初めて装飾品欄が一つ埋まったな。
そう言えば、俺のステータスってどんだけになるんだ。
「少し計算してみるか」
ＡＧＩ　：（１１５＋１００＋２００）×１．２×１．５×２×２＝２９９８
ＳＴＲ：（１１５＋４０＋２００＋１４９４）１．２×２×２＝８８７５
うん、ヤバいね。
これでも素の状態だから、あと最低でも6倍する上、細かなスキルでも上がってるからもう少し高いな。
「でも、今思うと俺のスキルって条件付きのものが多いな」
例えば、【暗殺】や【一撃必殺】等だな。
雑魚戦には、使えるがボス戦となるとほとんど意味をなさない。
でも、これだけのステータスなら大丈夫か。
「にしても、あのフェンリルは最大バフの俺より少し速かった事を考えると単純計算で１８０００以上のＡＧＩだったんだな」
物凄い……てか、笑えない冗談だ。
それに、怪鳥も俺の攻撃でも中々削れなかったのを見ると相当ＶＩＴが高かったんだ

な～。
「そう言えば、メイプルとサリーの奴はメダル集まったのかな。こっちは昨日で3枚も奪い取ったからけど、流石に残り2日で8枚も集められんだろうしな」
あっ、言い忘れてたけど俺は今、洞窟の中にいる。
これからどうしようかと考えてると、コツコツとこっちに向かってくる足音が聴こえた。
ここに来るには、目の前にある道からしかこれないので、そちらを警戒した。
「前回のイベントで2位だったエイだな」
そう言って、そこから現れたのは俺と装備が似た女性であった。
「えっと、どちら様？」
「前回のイベントで6位だったカスミだ。メイプルから少し話を聞いている」
「二人の知り合いか」
「まぁ、一応な」
それから、カスミから二人の事を聴いていた。
どうやら、メイプルが迷惑を掛けたらしい。
しかし、メイプルの行動にも困ったものだと俺は頭を悩ませるのだった。
「なんか、悪いな」

「別に気にしてないさ。それに少なからず楽しかったよ」
「まぁ、それなら良いんだか」
それから、俺はカスミと二人で暫く雑談をしていた。
内容は主にこのイベントで起きた事を話した次いでにフレンド登録もした。
あっ、カスミには俺が『男だ』と言った時はかなり驚いていたが、何とか色々と説明して理解して貰った。
てか、俺の事を男だと信じてくれたのはこれで二人目だ。
そして、俺が気付いた時には時刻は昼を回ってしまっていた。
「げっ、もうこんな時間か。悪いな、カスミも探索があっただろ」
「いや、目標の１０枚は集まったからどこかでレベルアップをしようかと思ってな」
「そうだったか。なら、俺と臨時パーティーを組まないか。俺も目標の枚数は集まってどうするか悩んでいたからな」
「それも悪くないな。では宜しく頼む」
「あぁ、少しの間よろしくな」
まぁ、なんやかんや有ってカスミと臨時パーティーを組むことになった。
それから、俺達二人は洞窟から出て、探索をしつつどこか良い狩り場を探した。

～少女等、探索＆戦闘中～
うん、キニシナイ：キニシナイ

特にメダルの収穫はなかったが、ちょこちょこプレイヤーが襲ってはきた。
「いや～、抜刀スキルを教えてくれて助かったよ。私はそこまで攻撃スキルが潤沢じゃなかったからな」
「別に構わないさ。こっちもいくつか攻撃スキルを教えて貰ったしな」
俺達は丁度良い狩り場を見付け、戦っている内にお互いにスキルを教え合った。
特にカスミはゼロを見た時は凄く驚いていた。
「私だけ教えて貰うのは不公平だと思ったからな」
「気にしなくても良いのに……しっ」
「敵か」
急に戦闘体勢に入った俺を見たカスミは、辺りを警戒しながら聞いてきた。
「かなり遠いが、こっちに向かってくる人影が見える【六式　明鏡止水】」
カスミの言葉に返答しながら、俺はスキルを発動して目を瞑った。
今まであまり使ってこなかった探知系スキルである。
あっ、このスキルの使用時に目を瞑る必要は全くないし、意味もない。

メイプルのスキル【パラライズシフト】の時に短刀をカチンっとやるのと同じだ。
何故かって？こっちの方が何か探知系っぽくないか？
そして、向かって来た人影は俺の死角から首筋を狙って、二刀のダガーで攻撃をしてきた。
ただ、俺はスキルを使っているので、そっちの攻撃は丸見えだ。
俺は瞼を開き刀を抜刀すると、ガキンッと音を鳴らして敵の攻撃を防いだ。
「あらら～、防がれちゃったか」
そう言うと、お相手さんは攻撃のぶつかった反動で後ろへと距離をおいた。
あれ、この声は……。
すると、さっきまで雲に隠れていた月が現れ、この場を照らし始めた。
「やっぱりサリーだったか」
「エイー:ごめん、暗くて気付かなかった。それにカスミも一緒だし」
「暫く振りだな、サリー」
俺達はお互いの素性が分かると、武器を納め集まっていた。
サリーから話を聞くと、メダル集めの為にＰＫをしていたみたいで、サリー１人の様だ。
「成る程な。それであと何枚足りないんだ」

「2枚だね。でも中々持っている人は少ないみたい」
どうやら、俺と会うまで相当倒したみたいだったが、成果はなかったらしい。
「そうか。ほら、やるよ」
俺はインベントリからメダルを2枚取り出すと、サリーへと渡した。
「えっ、良いの」
「あぁ、俺はもう10枚は集まってるからな」
「そう。なら、遠慮なく貰うね」
そう言ってサリーはメダルをインベントリにしまった。
それから、サリーにメイプルの事を聞くと少し離れた洞窟に居るみたいだ。
「今日が終われば、明日はイベント最終日だな。目標の数は揃ったしどうする？」
「う～ん、無理して探索する必要もないし洞窟の中で1日過ごすかな」
「んじゃ、そうするか。カスミはどうする」
「特にやりたい事もないし、お供するよ」
「それじゃ、決まりだな」
こうして、俺達三人はメイプルの居る洞窟へと向かい、まったりと1日を過ごす事になった。
その時に二人にもゼロを紹介し、二人からもシロップと朧を紹介された。

その後、何事もなくイベントが終了したが、町へとは戻されず白い空間に転送されていた。
「そっか、金のメダルで特定のスキルと交換出来るんだった」
取り敢えず、時間制限は無いようなのでゆっくりとスキルを選んでいた。
そして、数十分の時間を掛けてこの二つのスキルを選んだ。

＝＝

【閃光】
ＡＧＩが１．５倍になる
＝＝

【創生魔法・風】
風で思うままの形を創る事が出来る
消費ＭＰ　１０００
＝＝

えっ、前者はともかく後者は何故選んだって。
それは秘密だ。

まぁ、選んだ理由はすぐに分かるだろう。
それよりも、メイプルが今回で選んだスキルでシロップと空を飛んだ事には驚いたなぁ。
やっぱり、メイプルの思考回路にはついて行けないな。

自由気ままに妹がＮＷＯをやるそうです

第二回イベントが終了してから、一週間がたっていた。

この間に色々とあった。

現実でのメイプルもとい楓がゲーム内での癖が出て、恥ずかしい思いをして３日間ゲームにログインしなかったり、防御力貫通スキルに対抗出来る完全防御スキルの追加。

あと、ギルドホールの追加……いや、解放と言った方が近いか。

そして、メイプルが戻って来てからギルド【楓の木】を設立した。

最後に一番、俺に関係合ったのはスキルの修正だった。

【二刀流】のステータス上昇が無くなり、【疾風ノ舞】の上限が５０％になったり、【暴虐者】の上限が１００なったり、【形式】１日２０回から１日１０回しか使えない様になった。

まぁ、デメリットはあるが無制限の上昇だったし、俺にはほとんどデメリットは関係

無かったからな。
ただ、スキルの修正で常時ステータスがＡＧＩが１０００位、ＳＴＲは３０００位下がってしまった。
まぁ～、化け物じみたステータスしてたから、多少はマシにはなったが……それでも化け物ステータスしてるからなｗ
こうなった原因は、絶対にフェンリルをソロで討伐したからだろうな。トホホ
以上！この一週間であった主な出来事だ！

「帰ったら、スキルの練習をしないとな」
皆さん、こんにちは　こんばんは　おはようございます、影宮　万里です。
現在進行形で、家に向かって帰路をたどっている所です。
もうすぐで第三回イベントが始まる為、ギルドメンバーは羊の羊毛を集めていた。
今回のイベントは期間限定で出現する赤色の牛を倒してドロップアイテムを集めるイベントで、羊毛を使った装備を着けて倒すと、ドロップ量が増加するらしい。
と、説明をしている内に家へと着いた。

「ただいま～」
俺は家に入るとそう言って、階段を登り二階にある自分の部屋へと向かおうとした。
「お兄、お帰り～。ちょっと聞きたい事があるんだけど」
「んッ、何だ？」
俺は登ってる足を止め、後ろにいる妹の方へと体を向けた。
コイツは影宮　千里。
さっきも言った通り、俺の可愛い双子の妹だ。
「お兄って、ＮＷＯって言うゲームをやった事ある？」
「えっと、今ハマってるゲームだが」
珍しい事もあるもんだ。
妹はゲームに関して無関心だったからな。
「なら、少し手伝って欲しいだけど……今日、友達に誘われてね」
「別に構わないが、珍しいな」
「いや～、友達に泣き着かれちゃって……ね」
「そうか。俺は向こうでは赤目で少し髪が長めで設定してるから見付けたら声をかけてくれ……後、絶対に笑うなよ」
「うん???分かった～」

俺はそれを聞くと、二階に向かって自分の部屋へと入った。
そして、制服から私服へと着替えて早速ＮＷＯの世界へと向かった。
取り敢えず、俺は千里がくるまで広場にあるベンチへと座って待つ事にした。
１０分程時間が経った辺りで、初期装備の片手剣を装備をした少女が現れた。
見た目は、黒髪のポニーテールで眼は紫色で身長は俺と同じ位だ。
顔つきは変えてないのか、千里と同じだったので多分、本人だろう。
キョロキョロと周りを見渡しており、俺と眼が合うと急に固まってしまった。
「あ～、絶対にこれのせいだな」
そう呟いていると、彼女も我へと返りこっちに向かって歩いて来た。
「えっと、お兄……だよね」
「そうだが……こっちではエイな」
俺がそう言うと、目の前の少女は肩をピクピクと震わせていた。
そして、盛大に……笑い出した。
周りにいたプレイヤーは急に笑い出した彼女に目を向けていたが、今は気にしている場合じゃない。
「笑いすぎだ」
そう言って、俺は妹にデコピンをした。

「いッたぁ～、何するの　お兄」
　妹はおでこを押さえ、涙目でこっちを見てきた。
「笑うなよって言ったよな」
「だって～……ぷっ」
「はぁ～、もう良いや。名前とステータスはどんな感じにしたんだ」
「名前はチィ。ステータスはこんな感じ」
そう言って妹の千里もといチィはステータスを見せてきた。
??????????????????か、チィって安直な名前だな……って人の事は言えないな。
??????????チィ
??????Lvl
HP　４０／４０
ＭＰ　１２０／１２０
【ＳＴＲ　２５〈＋１０〉】
【ＶＩＴ　２０】
【ＡＧＩ　２５〈＋５〉】

【ＤＥＸ　０】
【ＩＮＴ　３０】
装備
頭【空欄】
体【空欄】
右手【初心者の片手剣】
左手【装備不可】
足【空欄】
靴【初心者の靴】
装飾品【空欄】
【空欄】
【空欄】

スキル
なし
??????????????????????

「へ～、魔法剣士って感じだな」
「うん、両方やってみたかったから合わせちゃった」
「まぁ、好きにしたら良いさ。楽しくやってこそゲームだからな」
にしても、サリーと似た感じになったな。
違うとすればサリーは接近主体で魔法はおまけ程度だが、千里ことチィの場合は魔法がメインって感じだな。
それより、折角妹と同じゲームをやるんだし、少し位サービスしてやるか。
「なぁ、俺からのプレゼントで初歩魔法のスキルを買ってやるよ」
「本当！ありがとう、お兄」
「だから、エイだって言ってるだろ」
「でもお兄はお兄でしょ？」
「はぁ、もう良いよ。好きに読んでくれ」
そして、俺達二人はスキルの売っているＮＰＣのお店に向かい、妹に全属性の初歩魔法のスキルを買ってあげた。
えっ、妹に甘くないかって。
そもそも、可愛い妹を甘やかす事は悪いのか。
否、そんな事はない。

あと、俺は一応シスコンではないからな！断じてシスコンではないからな！

「そうだ、チィってどこかギルドに入るのか」

「えっと、誘われた友達と一緒のギルドに入るつもりだよ……と約束時間になっちゃった」

「そうか。じゃぁ、ここからは別行動だな」

「うん。ありがとうね、お兄」

「あぁ」

そして、チィは来た道を引き返し、友達の待っているだろうと思う場所へと走っていった。

それにしても、チィが入るギルドってどこなんだろうな。

もしかして、結構大規模ギルドだったりして……まぁ、そん事はないか。

「そう言えば、忘れてたけどあの素材を使って装飾品を作れるのかな。イズさんに聞きに行くか」

俺はスキル練習の前にイズさんのお店に寄ることにした。

「あら、エイ。今日はどうしたのかしら」

「ちょっと見てもらいたい素材があるんです」
そう言って、インベントリから例の素材を取り出し、イズさんに渡した。
イズさんはそれを受け取ると、青いパネルを表示させて色々と操作をしていた。
「それで装飾品を造って貰いたいですけど」
「ん～。造れるには造れるけど、相当なお金が必要になるわよ」
「どれぐらいですか」
「１０００万Ｇ」
えっ、ちょっと待て落ち着け俺……深呼吸だ深呼吸。スー　ハー、スー　ハー
うん……って落ち着けかーッ。
以上、エイの心の中の心境でした。
「えっと、何でそんなにも掛かるんですか」
「まぁ、ザックリと説明するとエイが装備しているユニークシリーズに近い物がこれで造れるみたい」
「成る程」
そうなると、この値段に納得出来るな。
てか、そんなに貴重なアイテムだったのか。
もしかしたら、今後に似たアイテムが手に入るクエストが追加されるかもしれない。

「それでどうするのかしら、エイ」
「お願いしても良いですか」
「分かったわ」
　そして、俺はイズさんに１０００万Ｇを払った。
　これで俺の所持金は底をを着いてしまったが、強力な装備が手に入るなら、必要経費だ。
「それとエイは羊毛狩りには行かないの」
「俺は良いですかね。スキルの練習をしないといけないので」
「へ～、どんなスキルなの」
「こんなスキルです【風創生・拳銃】」
　すると、俺の左手に風が集まっていき、拳銃の形へとなりそれを掴んだ。
　一応、弾も発射する事が出来るが、中々上手く命中させる事が出来ないので、今の内に練習をしている訳だ。
「凄いわね。どんなスキルなの」
「前のイベントのメダルで手に入れたスキルです。けど、消費ＭＰは馬鹿みたいするので取ってる人はいるかは分からないですが……」
　他にも、一気に複数の物を創り出せるが、一つにつきＭＰが消費されし、細かくイメー

ジをしないと形に出来ない等、結構難しいスキルなのだった。
ただ、一度出来てしまえば、スキルとして保存されるらしい。
今は【深淵和装】のスキルスロットに装備しているので、1日5回は消費無しで使える。
「面白そうなスキルね」
「まぁ、結構　試行錯誤できて楽しいですね……と、そろそろ行きますね」
「装備の方は3日後には完成させておくわね」
「お願いします、イズさん」
そして、俺はイズさんのお店を後にし、スキル練習の為に人気の少ない場所へと移動した。

自由気ままに新スキルのお披露目です

イズさんに装備の依頼をした翌日、メイプルからギルドホールに来るように言われた。

ギルドホール行くと、ギルドメンバーが全員が集まっていた。

てか、俺が最後かよ……。

「では、第一回ギルド会議を始めまーす。今回はクロムさんから皆に提案が有るそうです」

「皆も知っての通り運営から第三回、第四回イベント、更に第三層の追加が発表された」

「第三回イベントは特定のドロップアイテムを集めるだけで問題無いが」

「問題は第四回イベント、ギルド対抗戦だね」

第四回イベント。

前回の第二回イベントの様に時間加速を使う影響で、リアルでの都合が合わないと参加する事が出来ない。

更に俺達のギルドは少数ギルドなので、当日参加が出来ない人がいるとかなり厳し

い。
「って事は、ギルドメンバーを増やしておきたいな」
「そう言う事だ。皆はどう思う」
皆の意見は賛成。
ギルドメンバーを増やす事に決定した。
そして、それはメイプルとサリーに任せる事となった。
「他に何か伝えたい事がある人は……いないみたいなので、これで第一回ギルド会議を終わりまーす」
「それじゃ、俺はやる事があるから」
「あら、今日もスキルの練習かしら」
「えっ、何々！」
イズさんが言った言葉にメイプルが反応し、俺に近付いて来た。
メイプルに反応して他のギルドメンバーもこっちを向いていた。
「【風創生・拳銃】……こんな感じのスキルだ」
「カッコいい!!」
眼をキラキラさせながら、メイプルは両腕を振っていた。
それから、俺はイズさんに説明した様に他のギルドメンバーにも話した。

サリーからは何故かジト目で見られてるが、気にしないでおこう。
「この世界で近代兵器を見る事になるとは」
「まだ上手く使えないけどな……んじゃ、そろそろ行くわ」
そう言って、俺はギルドホールを後にして、いつもの練習場所へと向かった。
他のメンバーも素材集めや羊毛集めへと向かってる事だろう。

それから数時間後、メイプルから再びギルドに来るようにとメッセージが来たので、一度ギルドへと戻った。
戻ってみると、そこにはメイプルや俺より小さい二人の少女がいた。
どうやら、新しいギルドメンバーを見つけた様だった。
名前はマイとユイ、二人ともＳＴＲ極振りの初心者プレイヤーだ。
「流石、メイプル。普通じゃない奴を連れてきたなぁ」
「ギルド対抗戦まではまだまだ時間はあるし、ガンガンレベルを上げましょう」
「僕らも何か手伝える事があったら言ってね」
「「あ、有難う御座います」」

二人がそうお礼を言って頭を下げると、机にぶつけてこれを粉々にしてしまった。
俺以外のギルドメンバーは眼が点になっていた。
「あわわッ。ご、ごめんなさい」
「良いよ良いよ、気にしないで」
「流石はＳＴＲ極振り、対した破壊力だ」
「それだったら、エイも同じ事が起きるんじゃないかしら」
「でも、そんな事は一度も見たことないな」
何故か俺の方に眼を向けるギルドメンバー達。
はぁ～、と溜め息を吐いて少し強めに二人が壊した机を叩いた。
すると、机は更に粉々となった。
これを見た皆はまたもや眼が点になっていた。
「一応、俺も出来るが力加減はしっかりと出来ているから問題ないぞ」
「流石はサリー並みのＰＳを持つエイ。変な所でもその力を発揮してたか」
「エイ、この二人の装備を造らないといけなくなったから、例のアレは少し遅くなるけど良いかしら」
「あぁ、構わないぞ」
「アレって！」

またもや、メイプルがイズさんの言葉に反応して眼をキラキラさせながら、こっちに近付いて来た。
流石に今日は色々と説明したので、これ以上は面倒くさいので、俺は逃げるようにギルドを後にした。
『あっ、待ってよ～』とメイプルの声が聞こえたが無視して……。
「ふう、ここまでこれば大丈夫だろ」
それにしても、メイプルって結構　好奇心おおせいだよな。
かなり気になってたぽいし、多分イズさんに聞いてるだろうな。
口止めもしてないし……。
「それより、このスキルにも早く慣れないとな」

あれから数日が経ち、第三回イベントが目前に迫っていた頃、またもやメイプルに呼び出された。
てか、呼び出し過ぎだろメイプルの奴。
まぁ～時間跳躍させてる主も主やけど……

（ちょっと、こっちに干渉しないで貰えるかな～）
（あー、悪い悪い）

「それでメイプルちゃん、私達ギルドメンバーを集めてどうしたの」
「新しいスキルをお披露目をしようと【身捧ぐ慈愛】」
メイプルがスキルを発動させると、天使の翼が現れて髪の色が金色になり、頭上に天使の輪が現れた。
うん、完全に天使だな。
すると、近くにモンスターが現れて俺達に攻撃をしてきたが、ダメージが入ると事はなかった。
まぁ、細かく説明しなくても皆は知ってるから良いよね。
うん、説明が嫌で……ゲフンゲフン……説明が面倒くさいからな。

それ、言い直した意味無くね!?
ｂｙ　久しぶりの天の声さんでした
気にするな!……って誰に行ってるんだろ。
「あっ、そうだ。エイ、アレが完成したから渡すわね」

イズさんは俺の元に近づき、インベントリから例の装備を取り出して、渡してきた。
「へぇ、レッグホルスターか」
「前に拳銃を見せてもらったじゃない。その時にあったら便利だと思ったのよね」
実際に装備をしてみると、見た目がシンプルであった為、そこまで違和感は無くて和装のおかげでレッグホルスターが隠れる様になっていた。
あと、拳銃以外にも弾倉（マガジン）も付けれる様になっていた。

【大狼のレッグホルスター】
【加速世界】
【破壊不可】

??????????????

「わぁ、何か物凄いスキルだな」
俺は装備の詳細を見たら、ステータスが上がらない代わりに強力なスキルが備わってした。
オマケに【破壊不可】が付いてるし……。
「試しに使ってみたら」
「そうですね【加速世界】」
すると、周りの動きが止まって見える様になった。
実際は極僅かに動いていたが、パッと見は止まってる様にしか見えない。
俺は拳銃を創り出してモンスターに向けて発砲してみた。
弾は発射して少し進んだ辺りでこの世界と同じ様に止まった。
「成る程、俺が所持しているもの以外はこの世界の影響を受ける訳か」
取り敢えず、皆を攻撃していたモンスターの脳天を狙って一発ずつ発砲した。
あと、試して分かった事はこのスキルが発動中は俺の姿は認識されないみたいだ。
まっ、詳しい事は『クロックアップ』をネットで調べてくれ。
「おっ、丁度切れたみたいだな」
すると、近くにいたモンスターが同時にポリゴン状となって消えた。
「急にモンスターが」

「もしかして、エイがやったの」
「まぁ、そうだな」
　俺は皆にこのスキルについて話しておいた。
　まぁ、初めは驚いていたが、暫くするとこのギルドでは『普通』となっていた。
「メイプルもそうだけど、エイも人外の仲間入りかな」
「私達もこのギルドにいる限り『普通』では無くなるかもな」
「かもな。にしても、エイの拳銃って前よりリアルになったよな」
　そう言って、クロムが俺の拳銃を指で指した。
「あぁ、現実の物になるべく近付けてみたからな。だから、弾も12個入ってるし弾倉も創り出せるぞ」
「他に何が創れるのかなぁ」
「今の所は狙撃銃、翼、拡散銃、各弾倉かな」
「メイプルよりもヤバそうだな」
「別に良いじゃない。味方なら」
　こうして、メイプルとおまけで俺のスキルのお披露目が終わった。
　でも、何故か第三回イベントでメイプルがまたもや、やらかすだろうと思ったのは気のせい……だよな。

２０話　自由気ままにゼロ育成です。

あれから特に何事も……無いわけがなく、新メンバーとして加わったマイ＆ユイのレベル上げをメイプルが手伝うため、ヒドラがいた毒龍の迷宮へと向かっていたらしい。

そこでメイプル曰く、普通にやってもつまらないからと迷宮攻略ＲＴＡをやったそうだ。

レベル上げ自体はうまく進んだのだが、流石はメイプルと言った方が良いのか、はたまた運が良いのか、二人に化け物スキルを覚えさせて戻ってきたみたいだ。

以上がサリーから簡潔に聞いた近状報告であった……メイプルと行動すると、良い意味でロクな事がないなぁ～。

そして、第三回イベントが目前へと迫っていた。

「さ～て、そろそろこっちにも手を付けないとな」

「ん？何かやる事でもあるの」
　俺は独り言のつもりだったが、サリーが反応してきた。
　そんなに声大きかったか？
「あぁ、ゼロの育成をやらないと思ってな」
「そう言えば、覚醒してるのほとんどみないね」
「自分のスキルで手一杯だったからな」
　俺と違って、メイプルとサリーはテイムモンスターのシロップと朧を育てているらしく、結構強くなっている。
　俺のゼロは第二回イベント以降、ほとんど育成をしていないため、第四回イベントの事を考え育成をしようと思った次第だ。
「いるいないでは結構、戦況が楽になるからね」
「そうなんだよなぁ～」
　一度、サリーが朧と共闘している所を見ていたがかなり選択肢が増えて、楽な立ち回りが出来ていた。
　それに折角、苦労して手に入れたので使わない手はない。
「んじゃ、俺はそろそろ行ってくるわ」

「はいは～い、行ってらっしゃ～い」
そんな言葉を負目に、俺は森の中へと向かっていた。

「よし、この辺りで良さそうかな」
俺は第一階層の始まりの町から、近いわけではないが少し離れた場所へとやってきた。
ゼロとのレベルより少し高いが俺自身もいるわけなので、このくらいで丁度良いだろう。
「ゼロ【覚醒】！」
「悪いな、暫く出せなくて」
俺はそう言いつつゼロの頭を撫でた。
ゼロもそれが嬉しかったのか、嬉しそうな顔をしていた。
すると、茂みがゴソゴソと動き、暫くするとモンスターが飛び出してきた。
「最初の獲物だな、ゼロ攻撃だ」
俺がそう言うと、ゼロは遠吠えをあげてそのモンスターに攻撃を仕掛けた。

ゼロはモンスターからの攻撃をうまく避け、自慢の爪で攻撃を当てた。
流石にこれだけではやられなかった。
「良いぞ、ゼロ。【ひき裂く】」
すると、ゼロはさっきより鋭く速い攻撃でモンスターを倒した。
それを見るや否や、大きい遠吠えを上げた。
「良くやったな、ゼロ」
そして、また撫でてやるととても嬉しそうに尻尾をフリフリしていた。
……。
その光景を見てると、見た目はあの時の狼に近いため、なんだかあの時の凛々しい姿はどこに言ったのやらと思うのであった。
「まっ、懐いてる分にはいいかｗ」
俺がそう呟くと、また草むらがゴソゴソと動き新たなモンスターが俺達の前に出てきた。
「おっと、次の獲物みたいだな」
今度は連携がてら、俺が前へと出てモンスターを攻撃を回避した。
その隙にゼロがそのモンスターに攻撃を加え、あっという間に倒していった。
「これは結構、良いな」

自分が回避に集中できる上に、敵にダメージを与えれるのだから。
この後に攻守を逆パターンでやってみたが、やはりかなり楽にモンスターを倒すことが出来た。
ピロリン～♪
「ん？お、ゼロのレベルがいくらか上がったみたいだな」

ゼロ　Ｌｖ８
ＨＰ　１００／１２０
ＭＰ　１５０／１６０
【ＳＴＲ　８０→９０】
【ＶＩＴ　２０→２５】
【ＡＧＩ　１００→１２０】
【ＤＥＸ　３０→３５】
【ＩＮＴ　３０→３５】

「少ししか上がってないのに、ステータスの上昇量ヤバイな」
やっぱり、あれだけのエネミーを配置していたのだから、それなりの強さがあったか。

取り敢えず、このままある程度ゼロのレベリングといきますか～。
「ゼロ、森の中を突っ切るぞ」
「ワゥ！」
うん、なんだか狼より犬に見えてきた。
まぁ～狼も犬種だから似たようなものかw
そして、俺達は森の中を駆け抜けて、出会いがしら見つけたモンスターを倒していった。

「おっと、ここは確か毒龍の迷宮だったか」
ゼロと森を駆け抜けていたのだが、いつの間にかダンジョンの入り口に辿り着いていた。
いつだったか、メイプルにこのダンジョンの事を教えた事があったな～。
それより、別にここには対した用は無いのだが、ここのダンジョンはクリアしたことがない。

ましてや、今のゼロの能力を試すのに打ってつけではないか。
そうとしたら、善は急げだ。
「ゼロ、力試しにこのダンジョンをクリアするぞ」
「ガゥー!」
「おっと、やる気みたいだな。んじゃ、しっかりと付いてこいよ!」
そう言うと俺は全速力でダンジョンを駆け抜けていった。
道中、モンスターが現れたが瞬く間にポリゴン状へと変わり、俺達が通った後には何も残らなかった。
「よっと、着いたみたいだな」
今、俺達の前には大きな扉があった。
ここが、メイプルが倒したヒドラ戦の入り口である。
「こっからが本番だ、ゼロ。気を抜くなよ」
「ア゛ゥ」
「よし、良い返事だ。んじゃ、行くぜ」
そう言うと俺は目の前の扉を開き、中へと進んだ。
中に入り暫くすると、扉が自動的に閉まり目の前にはヒドラが現れた。
俺がやったら、一瞬がケリが付いてしまう相手だが、それだと意味がない。

なので、今回はゼロが攻撃メインで行くことにしよう。
「ゼロ、俺がアイツの攻撃を引き付ける。その間に攻撃をするんだ」
俺がそう言うと、ゼロはコクりと頷いた。
二人のテイムモンスターとは違い、ゼロはある程度は自信で考えて動くことが出来るらしい。
「よし、行くぞ」
俺はその場から駆け出し、ヒドラの元へと近づいた。
ヒドラは近付いてきた俺に、毒のブレスを吐いてきたが、そんなのは余裕で躱した。
その間にゼロが攻撃を仕掛けていき、ヒドラにダメージが入った。
そのせいで、ターゲットがゼロへと行こうとしたが、そうはさせないと俺はヒドラに一瞬で近づいて顎に蹴りをお見舞いした。
なるべく力を抑えて……。
すると、それが気に食わなかったのか、またターゲットが俺へと向かい、先程と同じようにブレスを吐いてきた。
ただ、さっきとは違い、広範囲にばらまく様にしていた。
これはゼロの方へも被害が向かったが、流石は俺の相棒だ……俺と同じく少しもかすらずに避けていた。

「よし、このままターゲットは俺に向くようにするから、ゼロは思う存分攻撃を続けろ」
俺がそう言うとゼロは大きな遠吠えを上げた。
ゼロもやる気みたいだな。
んじゃ、いっちょ回避盾の仕事でもしますか！

それから、俺とゼロの連携でお互い無傷の状態でヒドラを倒した。
「やったな、ゼロ」
そう言うと、ゼロは俺に飛び付いて頭をスリスリと擦り付けていた。
そして、俺が体を撫でると尻尾もブンブンとふっていた。
ん～、これは完全に犬だな……なんだか転〇ラのラ〇ガみたいだｗｗ
ピロリン～♪
「おっと、ゼロのレベルが上がったみたいだな」
ここに来るまでに、結構レベルは上がってたが、最終的にゼロのレベルは２５になった。
ステータスもかなり上がり、そこらの敵なら一人でも倒せるレベルだ。

ん？

良く見たら、レベルアップの他に俺らはスキルを覚えていた。

＝＝

【危機感知】

常時発動のパッシブスキル

自分自身に敵意ある攻撃・行動をすると、体のどこかにちょっとした痛み（ちょっと不愉快なもの）が走る。

痛みを感じた場所が攻撃や行動で狙われている所となる。

相手からの距離制限はなく、これで走る痛みはダメージはない

取得条件

１０分以上、ヒドラの攻撃で状態異常にならずに自分以外がトドメをしている

＝＝

「確かに俺がほとんど攻撃してないから、久々に長い戦いになったが、それが幸を指すとは」

それにゼロの覚えたスキルも強力なものだ。

＝＝＝

説明がないだって？
それは今後のお楽しみってことで～♪
まだ、スキル内容決めてないって事じゃないよ
（ゞノ・∀・；）
ちゃんともう内容は決まってるからさｗｗｗ
本当のホントだからね!?
絶対、フラグじゃないからね!?
ーーーーーｂｙ　主よりーーーー

「んじゃ、そろそろ戻るとしますか」

そして、俺達はヒドラを倒して出てきた魔方陣に乗り、始まりの町へと戻るのであった。

２１話　自由気ままに見た目が変わりました。

つい先日、第三回イベントが始まった。
以前も説明した通り、赤い牛を倒した時にドロップするアイテムを集める採集イベントだ。
この為に以前から集めていた羊毛でイズさんがメイプル、サリー、カスミに装備を造っていた。
装備に羊毛を使えば使うだけ、ドロップ量が多くなるみたいだ。
カスミが見た目を気にしてらしいが、イズさん曰くそこはどうにもならなかったそうだ。
まぁ、真意は分からないが……。ジトメ
「にしても、作業ゲーになってきた上、メイプルにはこのクエストは荷が重いだろうな」
イベントが始まってから、３日が経った。
対象のモンスターがフィールドに出現するので、ＡＧＩが低いプレイヤーには不利なイベントだ。

でも、こう言った時に限ってメイプルの奴は何かしら、やらかすんだよなぁ。
特に変なスキルを手に入れたりとか……。「って、ここは何処だ？」
どうやら、考え事をしながら走ってたら、見覚えのない墓場に来ていた。
てか、この世界で墓場なんて初めて見たけどなッ。キリッ
「はぁ～、俺も他人の事は言えないなぁ」
取り敢えず、突っ立てても仕方ないので、前へと進む事にした。
暫く歩いていると、モンスターに一匹も出会う事なく、他の墓より人一倍大きな墓あり、何故かそこには以前にも見た事がある封印の札が幾つも貼られていた。
「何か封印されているのか」
俺はそれに触れようとした瞬間、拒絶反応が起きたみたいに電撃が走った。
「つッ、前みたいに燃やすか」
そうしようと、スキル【妖怪変化・妖狐】を発動しようとした時、目の前に転移の魔方陣が現れた。
『……力を示せ』
そう声と共に……。
「よし、行ってみるか」
俺は魔方陣に乗ると、眼に入ったのは以前に烏天狗と戦った部屋と同じで、中央には

鎖で身動きが取れなくなっている一匹の鬼がいた。
『ソナタが最後になる継承者候補か』
「そう……なる、かな」
正直、来て早々こんな事になるとは思っても見なかった。
一応、この部屋から察するに戦闘をすると思うんだが……。
『我が名は豪鬼。大昔にこの地に封印された鬼神である』
「・・・・・・」
『だが、もう少しで妖力が尽き消滅する事となろう』
「・・・・・・」
『ただ、このまま消える前に、強き者に我の力を授けたいと思った』
「・・・・・・」
『……あの～、何か答えてくれません』
「あっ、ゴメン。少し寝かかってたわ」
アハハっと話を流そうとしている俺に、豪鬼はジト目でこちらを見ている。
そんな目で見るな、ゾクゾクする……訳ないだろ!!
あれ、以前にもやった気が……まぁ、いっか。
そもそも、此方の様子を知ってるかの様に話してくる事自体おかしくねッ!?

ま、まぁ気にしてもしょうがないか……。
「えっと、結局何をすれば良いんだ」
『ゴホン……簡単な事だ。我に力を示せ!!』
豪鬼がそう言った瞬間、奴に体力ゲージが表示され、視界の右上でカウントダウンが始まった。
しかも、1分……。
えっ。ちょっと待て、落ち着け……俺。
1分で豪鬼を倒せ……って、そう簡単な訳無いよな。
「取り敢えず、攻撃してみるか」
小手調べに【抜刀・一閃】を当てたが、豪鬼にはダメージが入っておらず、逆に似た攻撃が返ってきた。
「う～ん、特定の攻撃方法じゃないと倒せないのか」
そうしている内にも、徐々に残り時間がなくなっていく。
「考えるのは後だ。片っ端から試して見るか、ゼロ【覚醒】！」
ゼロは出てきた瞬間、遠吠えを上げた。
最近、覚醒させる度にするんだよなぁー。
ってか、そんなこと今は考えてる場合じゃないな。

「ゼロ、取り敢えずあの鬼に向かってひたすら攻撃をするぞ」
「ガウ！」
それからは俺とゼロは使える限りの攻撃スキルを全てぶっぱなした。
たが、どれも豪気の体力は減る事なく、自分達が攻撃した同じものが逆に全ての攻撃が返ってきた。
ただ、分かっていれば、それらを全て避けたのは簡単だった
しかし、時間だけが過ぎていくばかりで、何の手がかりもなく残り１５秒となっていた。
「くそッ【加速世界】」
一か八かの賭けだったが、案の定時間が止まった……事に近くなった。
でも、これで少し考える時間が出来た。
「はぁ。まず、斬撃・銃撃・妖術・魔法、そしてゼロの攻撃、全て効かなかったな」
俺は、今持てる全ての攻撃では豪鬼には効かない上に攻撃したまんまのものが返ってきて、こっちが体力だけ無駄に奪われるだけだ。
そもそも、『力を示せ』ってどういう事だ？
力……力……パワー……まさか!?
「これで違ったらもうお手上げだ」

俺は刀を鞘に戻して、拳を握り締めた。
この時、【加速世界】のスキルも消え、カウントダウンが進み始めた。
「さぁ、フィナーレの時間と行こうか！」
俺は一瞬で豪鬼の目の前に移動し、全力でぶん殴った。
『ぐふッ。中々の一撃だが未々だ』
豪鬼の体力ゲージが1割弱減っていた。
それに拳で攻撃した場合はさっきまで跳ね返ってきた攻撃も無かった。
そして、残り時間は１０秒程度……。
「なら、全弾（拳）持っていきやがれッ」
オーラッ！オラ！オラ！オラ！オラ！オーラッ！

『見事であった。ソナタなら我の力を存分に扱えるだろう』
残り……1秒……ギリギリだな。ハァハァ
そして、豪鬼がそう言い残すと目の前から豪鬼の姿はポリゴン状の光となって消えていった。
ピロリン♪

《スキル【妖怪変化・鬼神】を取得しました》
「おっ、もしかして妖狐と同じ様なスキルか」
俺はどんなスキルなのか、青いパネルを表示させて確認した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【妖怪変化・鬼神】
このスキルを初めて使うと永久にＳＴＲ　ＡＧＩ　＋２０％され、初スキル使用時から非スキル時でも一部の容姿が固定化される。
このスキル発動中は、このスキル以外の攻撃スキルが【封印】状態となり、武器の使用が不可能となる。
スキル発動時は更に容姿が変わり、拳と脚で与えるダメージが１００％上昇する。
１日二回まで
【鋼ノ鎧】
３０秒間、体術（拳と脚）以外のダメージが無くて当たり判定もなくなる
１日２回まで
【貫く拳】
３０秒間、防御力貫通攻撃が付与される

１日２回まで
【全反射（フルカウンター）】
１５秒間、あらゆる攻撃を全てはね返す
１日２回まで
【惨劇乱舞】
累計２０連撃の体術の与える攻撃
コンボは自由に組めるので毎回攻撃の種類が違う
１日３回まで
＝＝＝

がった。
ただ、それだけでは無く、胸がＤカップほど膨らみ下のアレも無くなっていた。
うん、完全に女の体になってるやん。
「大丈夫だ、このスキルのせいだ。解除したら元に戻る……筈だ」
あっ、声も女みたいに変わってるじゃん。
スキル使用前に物凄く嫌な予感がしていたが、多分……きっと……絶対に気のせいだ……ってか、気のせいで合ってほしい。
「解除」
俺がそう呟くと、角と炎『は』消え去った。
ちょっと落ち着け……俺。
こう言う時は素数を数えて落ち着こう。
２…３…５…７…１１…１３……
「……って落ち着けるかーッ！てか、こんな事があってたまるかーッ！」
スキルの解除はしたものの、女の容姿は元には戻らなかった。
もしかして、これが容姿の固定か。
どうして、こんな事に……。
ゼロの方は見た目が変わっていた事に少しの間ビックリしていた様子だったが、匂い

？なのか・はたまたスキルの影響か、暫くしたら何事も無かった様に足にスリスリしてきて甘えていた。

ってか、以前より積極的じゃないですかね？ゼロさんや・・・・・・・・・。

「はぁ、過ぎたことは仕方無い・・・・・・か。皆に何て説明しよう・・・・・・」

ハァ～、と肩を落としながら溜め息を吐き、いつの間にか現れていた魔方陣に乗って元の場所に戻ると思いきや、転移先は森の中であった。

「取り敢えず、ギルドに戻るか」ハァ

また、溜め息を吐きながら、この姿が他の人になるべく見られない様に急いで森を駆け抜けてギルドホームへと向かった。

「おい、悪魔と鬼神がクリアされた！」

「??????????????????」

「まじかして・・・・・・・・・・・・」

「悪魔はメイプル、鬼神はエイだ（　―。―）＝3」

「ま～た、あの二人か丶（；ω、）ノ」

「そもそも、今回は特定のアイテムを集めるだけのイベントでこんな事が起きるんだ

（＊゜・ω・）」
「そんなの此方が聞きたい位だ」（゜д゜）「」
「更にメイプルの方はまたまた、次層の激レアアイテムを手に入れてるし（？＿？）」
「あぁ～、胃が痛くなってきたぁ～（×＿×）」
「それにメイプルのギルド【楓の木】もヤバいよな」
「もう、これ以上何も言うな～（＞＿＜）」
「「はぁ（゜д゜）」」